
とある織斑家の最強親父

理不尽魔王（おりむらはるき）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある織斑家の最強親父

【NNコード】

N7710X

【作者名】
織斑春樹
【おひむらはるき】

理不尽魔王

【あらすじ】

一ノート生活満喫してたらマイシスターが子供を残して蒸発しやがった。

仕方がなく引き取り、二人を育てることに・・・。

親父、織斑春樹。娘、織斑千冬。息子、織斑一夏。取り敢えず頑張ろ。二人が立派に育つその日まで・・・。

ドタバタ織斑家劇場、ここに開幕也！

修正といふか新規。いつからはちょくち

よく更新します。

読む前に。（必須）

どうも。

今回、書いていた織斑家の最強お父さん！ですが、違和感がありあつたため、大幅に修正、新規しました。

なので前にも読んだ方で楽しみになさっていた方は申し訳ないのですが、また新しく書かせてもらいます。

読みやすいように書き直し、他のキャラクター視点を加えたので楽しめると思います。

なお、前にアンケートした“一夏の嫁は？”ですが、打ち切らせていただきます。

たくさん投票、ありがとうございました。

結果は次のようになりました。

一位、篠ノ之箇

一位、凰鈴音

三位、シャルロット・デュノア

四位、ラウラ・ボーデヴィイッヒ

五位、更識簾、セシリ亞・オルコット

六位、五反田蘭、布仏本音

七位織斑春樹（親父）

と、なりましたので。

筆、鈴、シャルロットと待遇をしながら書きたいと思います。

なお、外れたというか少ない方も色々ムフフ
みたいな事をしますので・・・腐腐腐腐腐腐腐腐腐腐・・・。

色々スキップしながらやるので、原作開始は前より早まります。

では。新しい織斑家の最強お父さん!、もとい“ とある織斑家ノ
最強親父”をお楽しみに・・・。

親父、爆誕。（前書き）

修正しました。

親父、爆誕。

本日は晴天なり。

空には憎たらしくほど太陽がさんさんと差すよりかんかんと照りております。

血口紹介をしよう。俺の名前は織斑春樹。おりむじはるき。年は三十路、詳しく述べば三十一歳。バリバリのおっさんをしています。

ちなみに童貞。仕事はめんどくさいからやめて一ート生活満喫中。

今日も変わらず家にて溜め込んだゲームをプレイしてたんだが…

「兄さん。悪いんだけど二人をお願いね。私達では育てられないから…。」

「……………そりゃないぜマイシスター！」

「あ、あの…。よろしくお願いします。春樹伯父さん」

現在の住所は都内の少し高めのマンションの一室。
玄関の前で肌寒くなってきた日にマイシスターの娘と赤ん坊の息

子が手紙を持つて現れ、俺絶賛混乱中。

あの馬鹿一人（一人はゴリ）……子供を押し付けて蒸発しがつたな……！

「…………まあ入れ。寒いだろ」

「は、はい。お邪魔します……」

「荷物寄越せ。重いだろ」

マイシスターの娘から小さな体には似合わない大きな鞄と背中に背負う赤ん坊を受け取ると乱雑した部屋を閉めてリビングにて赤ん坊を寝かせた。

マイシスターの娘はおどおどしながらリビングに入ると向をしたらしいのかとキョロキョロしていた。

取り敢えず手を無理矢理引っ張つてソファーに座らせると温かいココアを飲ませる。

「…………おい。まさか秋枝あきえはお前らを残して消えたのか？」

「…………それは……」

「ああ…………いい、いい。無理に話さなくていいわ」

「コアを飲んでリラックスしたマイシスターの娘と話すとやつぱり少し暗い顔して俯いた。

・・・んー、大方秋枝の奴が書き置きだけしてあのクソガキ（秋枝の夫）どこかに行つたんだろ。

昔に親父と喧嘩をしてから会つてないが元気なのかね？

とうつかやはり親父が結婚に反対して正解だわ。あの亭主、働かずにお枝だけを働かせて金を食い潰してたらしいからな。

秋枝もあんなクソガキのどこがいいんだか・・・。

「んー、行く宛はあるか？」

「・・・ない、です・・・」

どうするか。親父はすでに死んでるし、おふくろも俺が七歳の時に病氣で死んでる。

親戚はいるがどいつもこいつもろくでなしだからな・・・金しか考えないやつがいるし、育てられるとは思えん。

・・・仕方がない。

「わかった。あの馬鹿妹に代わつて俺がお前らの親父になつてやるよ」

「え、で、でも！春樹叔父さんに迷惑が・・・きやうー？」

バチンとトコッピングをするとマイシスターの娘は額を押されて涙目で見てきた。

「あーして。まずは代理組長とかおやつさんに電話するか。

「なに、するんですか・・・。」

「子供が遠慮すんな。親父からの遺言で秋枝がもし手に追えなくな るような事が起きたらお前らを頼むって言われたんだよ・・・あ、 もしもし組長ですか？お久しぶりです、春樹です」

さすが親父。秋枝のことはよくわかってるな。

取り敢えず昔、世話になつた人達に電話をして養子縁組申請せねば。

額を押さえながらおろおろする娘に饅頭を渡して電話に集中しながら紙にサラサラと書き込んでいく。

娘は戸惑いながら饅頭をパクリと食べながら俺と赤ん坊をチラチラ見るが取り敢えず無視して電話を掛けまくる。

「はい・・・はい・・・ありがとうやつさん。助かったよ」

『気に入りんな春坊。死んだ馬鹿からの頼みだからこいつでも言ひな 他にすることないか？』

「それならまた電話するから。うん・・・うん・・・ありがと。じ

やあな

電話を切るとサラサラとボールペンで簡単にメモするといついて、
けてない娘に目を向ける。

「おい」

「おやじい！」

「出掛けんぞ。上着を着ろ」

「え？ え？」

ガサゴソと親父の遺品が入った段ボールを漁ると昔に親父が秋枝を背負つた時に使われた赤ん坊用のあれが見つかる。のろのろと上着を羽織る娘より早く赤ん坊を背負うと身分証明書など必要なものを持ち出す。

「養子縁組届けを出すから付き合え。拒否権はない」

「あ、はい・・・わわわわっ」

娘を肩に担いで赤ん坊を背中に背負いつとマッシュンの一室から出て市役所に向かう。

・・・到着。頭にキングクリムゾンが浮かんだのは気にしない。

養子縁組届けを書き、身分証明書を出して待合室で待つ。

視線がチラチラ感じるがどこ吹く風で受け流しながら赤ん坊をあやす。

昔から親戚のガキとか孤児院のガキの面倒を見てたから慣れたものだな。

「は、は、春樹が・・・子供を・・・」

「いやああああああっ！－！織斑さんが子供を連れてるうううう！」

「

「神は死んだ！狙つてたのにいいいい－！」

そんな声が聞こえたのはじに愛嬌。

しばらくすると市役所の役員が書類を持ってきて正式にマイシスターの子供は俺の養子となつた。

掴み掛かる知り合いの股間を蹴り飛ばしたりと色々あつたがまづ

はマンションに帰ることにした。

「とうわけで今日から親父と呼びたまえ

「い、いや。できたら父さん辺りがいいなって・・・」

「・・・ま、呼び方は好きにしろ。部屋はあるからそこ使うか?そつちは俺が面倒見なきやならんから俺の部屋にするが・・・秋枝の奴、大丈夫かね・・・?」

「(・・・母さんから少し聞いてたけど・・・優しそうな人だな・・・)」

・・・織斑春樹。一児のパパになりました。
娘、
織斑千冬。息子、
織斑一夏。

俺三十二歳、千冬九歳、一夏一歳。

現在住所ちよい高めのマンション。

残金・・・一億七千万(荒稼ぎしたぜい!)。

織斑春樹・・・任侠の四季組組長の息子であり、数々の伝説を築いた“生ける最後の侍”と呼ばれる人類最強。現在は無職。

人類最強お父さん、ここに爆誕!

第7回話（前書き）

修正しました。

本日は晴天なり。

ぽかぽかと陽気な日差しにより、パパは眠気がパネエです。
というか日差しに当たりながら昼寝をしております。

デフォで隣にはマイシスターの娘、千冬が俺の腕を枕にして爆睡。
涎が冷たい。

本日は日曜日。全国のパパさん達は家族サービスをしたり、息子
にサンドバッグにされてるでしょう。

ちなみにN e wパパさんであるわたくしは育児のめんどくさをこ
ダウンして死んでおります。

甘かつた・・・夜に一夏はギャーギャー泣くし、腹が減つてもギ
ヤーギャー泣くし、俺がいないとギャーギャー泣く・・・
軽くノイローゼになりそうだ。マイシスター、貴様はこれが嫌で
逃げやがったな? そうだろ秋枝エ!!

「・・・すー・・・すー・・・」へへ

「・・・涎がダラダラだ・・・」れ、お気に入りのシャツなんだが
な

隣で寝る娘、千冬は涎をだらしなく垂らしまくってシャツに染み

を作りまくつてやがります。

だが許す。寝顔が可愛いから・・・写メつて写メつて〜。

二人、千冬と一夏を引き取つてからすでに一ヶ月。秋枝はあれから手紙も何も寄越さないから心配だと思うこの頃。
千冬は最初は遠慮していたが餌付けにより、なついた。お気に入りの料理はきんぴらごぼうである。

お前は年寄りか。

一夏はまだベビーボディなのでミルクを飲ませてる。

昔にやつたことはあるが久しぶりで不安だったが問題なし。一夏は会社帰りのサラリーマン並みにがぶ飲みしていた。

「千冬、は・・・離しそうにないな。足で取るか・・・ほつ

千冬にはシャツをがっしりとホールドされてるため、寝ながら足を伸ばしてテレビのリモコンを蹴り落として孫の手でファイシング。テレビをポチッとつけてお皿の定番の笑つていいかもを視聴。

司会のマリモさんとゲストのトークを聞きながら欠伸をする。日曜日なので平日に出たゲストのトークとCM中の裏話を爆笑しながら視聴視聴。

「…………」

「ああっ！千冬の奴、さらには涎を…？」

定番のいいかも～～～！を言つた途端、千冬の顔が緩みまくり、涎が増幅。マイシャツに湖の染みが広がり始める。長袖のシャツを着ているため、二の腕から間接部分まで染みが広がり、冷たさに体がブルリと震える。

ぐいぐいと千冬の頭を押して退かせようとするがさらに千冬は頬擦りをし、腕だけでなく胸部分にも染みが浸透中。

妙に力が強いな！ここのは親父の遺伝か！？

「離せ千冬ー冷たいんだよゴリラア……ああっ！洗濯物干さなきゃ！」

「でへへへ・・・・

仕方がない、千冬をおんぶして洗面所に向かい、洗濯機から俺の服や千冬、一夏の服を籠に入れてベランダに直行。ちなみに一人に買い与えた服は一桁を越えている。

正直、服なんかわからんから適当に買った。
予算は二千円にて買ったため、一万以内。
一夏はベビー らすで服やらガラガラやらオモチャを購入。計四万七千也。

他にも食材やら増えた家族により予算は倍増。我が家の中の金が消えています。

駄菓子！

親父が残してくれた金を実家から送金されたので口座の金の桁が跳ね上がる！！

・・・最初見たときは田を疑つたね。〇の桁が一つ上がつてたもん。

親父エ・・・てめえどんだけ貯めてたんだよゴリラア・・・。
妙にゴソゴソしてたのはこのせいか。

「今日は天氣がいいからもう少し干すか。というかいい加減にシャツを変えたい・・・水で、涎が気持ち悪い・・・」

洗濯機から出した洗濯物を全て干すと背中にヤクヨウシヘヘぱりつく千冬をどうしようか考え中。

いい案が浮かばないため、シャツにへばりつく千冬アレとシャツを脱いで新しいシャツを着る。

シャツを洗濯機に放り込むと手を伸ばすと固まる。

千冬、俺の涎（生産元、千冬）まみれのシャツを抱き締めながら

寝てやがつた。

しかも頬擦りしながら匂いを嗅いでるし。

それを見て千冬の将来が心配になるこの頃。

アホーツ、アホーツ

というわけで夕食。寝ていた千冬も涎を垂らしながら起床。自分の現状に気付くとトマトのように赤くなつて暴れる。顎を殴られる。ちなみに昇 拳より完璧なアッパーだった。

落ち着いた千冬に麦茶を出して夕食開始。

今日のメニューは寒いから一人で鍋をつつくことにした。

一夏はあーあー言いながら鍋に手を伸ばすがベビーにはまだ早い。ミルクを飲んでいたまえ。

「あーお父さん、それは私が育てた肉だ！」

「知らん。俺のシャツを涎まみれにしたくせにそれはないだろ。それに世の中は弱肉強食、食うのも食われるのも当たり前なのだよ千冬ー！」

「！？し、知らなかつた・・・さすがお父さん！勉強になるー！」

・・・ふつ。チョロいな・・・ガキなんざ」これにて封殺できるのぞ。

や。

大人気ないな俺。

そのせいで将来、千冬を再教育するのに苦労するのはまた別の話。

夕食のシメにラーメンをびっしり入れて完食。一人分だから腹はちょうどいいくらい。

皿洗いをしている際、千冬はテレビでナースコレ?奇想天外写真集と日曜日特番の番組を見ていた。

おーとかあーとかうわーとか言ひ千冬の後ろにはバタバタ手足を

動かす一夏。大人しくしろ。

皿洗いを終わらせるとテーブルに座つて緑茶を飲みながらホツと一息。

千冬はいまだにナニコレ？奇想天外写真集をガン見しながらみかんを食べていた。

もう完全に冬モードだな。千冬なだけに。

そんな冗談は置いといてテレビを見る千冬をそのままに、一夏を連れて入浴することにした。

髪は少しずつ生えてるがまだ坊主のツルテカハゲ頭のように髪は薄かつた。

・・・親父の知り合いのクソ坊主、あの頭は凶器だ。

日光を反射して紙を焼き尽くすなんてどんな人間だ。よくよく考えたら親父の知り合いにはまともな奴いない気がする・・・。

変態露出狂が当たり前みたいになつてるからな。うちの実家。

シャツの長袖を捲り、ズボンも膝まで捲つた状態で一夏の体を入念に洗う。

・・・当たり前だがまだチ 口は小さいな・・・俺は大口径マグナムだが。

親父はあれだ。拳銃どころかデス ター並みのでかさだな。

「うー、あー、あー」

「ん？もひ出るのか・・・って眠たそつだな。頭がカツクンカツクン動いてるぞ一夏」

下らない事を考へてると一夏がうどいとし始めたため、冷めない
よつこ丁寧に拭いてから服を着させてベビーベッドにダイブイン。

一夏は眠りについた（ドラ H風に）！

脱力したながらテレビをいまだに見る千冬に風呂に入れと言つた。
なのに千冬は一緒に入る！と言つて聞かないため、仕方なく入浴。
俺はロリコンではないため、欲情はしないが。

「あ、お父さん。今度の木曜日に授業参観があるんだが・・・大丈
夫？」

「んー？暇だから行けるぞ。一夏なら姐さんに預けたら大丈夫だし。
・・というか日本にいるのか？連れていくのがいいかな？（ボソッ」

「や、そり・・・やつた・・・」

湯船に一人で浸かりながら話すと予定ができた。

じついうのを話していると千冬が成長してると実感できる気がす
る。

じつして織斑家の日曜日は幕を閉じた。

千冬はいつもの「とく俺の布団に潜り込んで俺を抱き枕にしなが

ら熟睡開始。

寝顔が可愛いので気にしないよ。

第3回話（前書き）

修正しました。

本日は曇りのち晴れ。

お天道様は雲に隠れ、洗濯物が乾きにくい日である。

実際にリビングのベランダに続く窓やらには洗濯物が干してある。

そして本日は火曜日。千冬の授業参観から三週間過ぎた頃。我輩はパパさんなので家にて一夏と遊戯中。

千冬は小学生なので小学校に登校。

「あー、あー」

「いてててー！髪を引っ張るなー夏ー！」

きゅうきゅうと笑つべーボーテーのマイサンは俺の髪を引っ張つて遊んでおります。

髪を切らないので簡単に整えて縛つてポニーtailにしている。

そのため、一夏の一夏お気に入りのオモチャとなっていた。なぜだ。

そして娘は小学校にて頭が痛む勉強をしている。

前の木曜日に参加した授業参観の保護者面談では千冬はリーダーシップを發揮して皆を引っ張るから助かる。などと担任に言われた。俺が義理の父親になったことを聞いてきたがはぐらかして保護者面談を済ませて千冬と手を繋いで帰宅。千冬は終始笑顔だった。

授業参観でも千冬は特に勉強がわからないうつて事はなかつたので
パパとしては一安心一安心。

ちやんと勉強はせてるみたいだな、秋枝。

「まむまむ」

「うああああああつー? 一夏、俺の髪を食べるでない!」

ボーッと一夏を組んだ脚の中にはつぱり埋めて平日の笑つていい
かもを見ていると一夏がポーネの俺の髪を口にくわえてもむもむ食
べていた。

離させようとすればばげて泣くため、何かないかと周りを見渡す。

テレビから同念のマツモトさんの声と観客の笑い声が聞こえるのを
傍目に、部屋を物色する事にした。

赤ちゃん用のおしゃぶりは一夏が気に入らないから駄目。オモチ
ヤ・・・却下。

・・・一夏つて・・・何が好きなん?

「あーーーあーーー!」

「いだだだだだつー!」

どうするか考えていたら一夏に思いつきり髪を引っ張られ、一夏を見た。

そしたら物欲しそうな目をしてジーッと見てくるため、理解。

ミルクか。こいつ、ミルクを要求しているのか。

「あー・・・わかつたわかつた。準備するから待てや

「あー！あー！あいー！」

「・・・・・・・・・・・なんだこの胸のトキメキは・・・これが、親バカの心得か！？」

両手を上げて喜びを体現する一夏を見て心がなぜかトキメいた。

・・・ああ・・・親父・・・刻が見えるよ・・・新しい親の愛に
目覚めそうだよ・・・。

“いちかせんよう”と書かれた瓶に粉を入れていつものよつこ
ルクを作ると手で少し温度を調整する。

出来上がったそれを一夏の前に置くと一夏はハイハイしながら瓶
を持ってぐびぐび飲み始めた。

ハイハイはできるが、まだ立てないみたいだから残念。

「あーいー！」

「・・・・・一夏のバッくに銭湯の脱衣場が見えた・・・疲れて
るのか俺は?」「

銭湯の脱衣場がもやもやと一夏の後ろに浮かぶとふはー！と牛乳瓶を飲むサラリーマン風の男や腰にタオルを巻いたジジイが見えた。
・・・疲れてるのか俺は。今から寝た方がいいのか？

多少げんなりしながら一夏のミルクを作る合間に作つた焼きそばを食べながらミルク瓶を持つ一夏を眺める。

「・・・少しは静かにできないのかおのれは。 ジャングルの『コラ
みたいだぞ」

なぜか一夏はチーターの「きげんよ」を見ながら発狂してミルク瓶を振り回していた。

・・・将来は親父似だな。母さんの要素はないわ。
秋枝はどうぢらかといえば母さん似だけど。

でも親父の負の遺産（遺伝子）はたっぷりと受け継いでるからな。

焼きそばを食い終えると一夏からミルク瓶を没収し、一緒に洗う。

「みやーーー！」

「いだだだだだっ！痛い！痛いって一夏！」

皿洗いをしていると一夏がいつの間にか台所に来て髪にぶら下がつて遊んでいた。

無論、後ろに引っ張られるから首が後ろに反れ、首が変な音を立てていた。

ミルクは無いから諦めろ！

皿洗いを速攻で終わらせると猿よろしく髪にぶら下がる一夏を抱き上げて首を回す。

バキバキ鳴つた。一夏が反応して喜んだ。

「あいーー！」

「いたた・・・元気いいな一夏。パパは体が持ちそうにないぜ」

「あーーーー！」

「・・・・・・もつどうにでもなれ。親父、昔は苦労したんだな・・・子育て大変だ。改めて育ててくれてありがとう・・・」

少ししんみりしながら一夏を抱いたまま、ソファーに座ると一夏は手を伸ばして俺の鼻に突っ込んだり、口の中に指を入れたりと好き放題していた。

なすがままにされないと疲れがどんどん貯まり始め、気のせいかげつそりしてきた。

・・・ホームヘルパーか姉さん呼ばうかな？

ホームヘルパーはやめといつ。たぶん手に追えなくてギブアップするし、金がもったいない。

姉さんを呼ぶにしてもどこにいるかわからんし、貞操を寄越せと言われそうだから却下。

・・・・・・・・・駄目だな。親父が生きてればなんとかなったが今はいない。一人で頑張るしかないな。

「前途多難だな・・・」

「うーー」

膝に大人しく座る一夏とテレビの再放送ドラマを見ながらどうじよづかと再び思考に入る。

取り敢えず一夏が幼稚園に入るまでは家にいるようにして、幼稚園に入ればおやつさんか姉さんのツテで就職するつてのが今考えている事である。

小学校の担任にも仕事は何しますか？って言われて無職ですと

か言えないから働かねば。

二、一ト生活前、親父が死ぬ前は工事現場、四季組の力チコニ応援、
外国にてテロリスト狩りをしていたな。

俺がまだ四季組の一員として動いていた頃はこんな苦労はなかつたんだがな・・・親戚のガキつて言つても小学生くらいの奴を世話をしただけだしな。一夏みたいな赤ん坊はじめてだ。

そして辛い。死ぬ。疲れる。簡単に引き取ると発言した俺を殴りたい。

・・・でもたまに見せる千冬のはにかんだ笑顔、一夏の喜ぶ姿を見ればそれは無くなつた。

「ああ、俺は尊い命を育てるんだな。」と改めて実感させられた。
親父が言つてた命の尊さがわかつてきた。

「一夏、ほれほれ」

考えるのをやめ、自分のポーテールの髪を猫じゃらしのようにならせる

一夏の日の前で振る。

一夏 細贅反応中 猫のよこは髪を搔もうと小さな手で猫ハニチ。

しばらく遊んでいたと十冬帰宅。

赤いランドセルを背負い、新聞の夕刊や手紙とかを持ってリビングにログイン。

「ただいまお父さん」

「お帰り千冬。 今日まだいた？」

「んー、特には無かつた。でも遠足があるからプリントをもらつて
きた」

「・・・ん? 遠足? こんな寒くなつてきた時期にか?」

ポニー テールの髪を一夏がギリギリ届くか届かないかの場所に垂
らすよつに首に巻き付けて千冬からプリントをもらい、チック。
一夏はあーあー言いながら髪に手を伸ばすが届かず。泣きそうにな
れば触りせてまた・・・といった感じをしながらプリントを読み
終える。

11月7日に遠足・・・よく見たら弁当持参つて書いてるな。

・・・あれ?俺が作るのか?

クフフフ・・・姐さんとおやつさんからお墨付きの俺の料理の腕
をみたいと申すか・・・。

「・・・ん。わかったわ、取り敢えず手を洗つてうがいへゴー。冷
蔵庫にチーズケーキがある」

「いただきますー。」

ダダダッと千冬が洗面所に向かうと、まだに髪に手を伸ばす一夏を見てベビーベッドに収納、又は幽閉。

泣きそうな一夏を見て張り裂けそうになるマイハートを必死で我慢しながらホットココアを作る。

千冬が戻ると一目散にチーズケーキにかぶりつき、完食。

・・・はやつ。一瞬でなくなつたな、チーズケーキ。

「宿題あるならやつとけ。飯はまだかかるからな」

「わかった！」

「できたら檻に入ってる一夏の相手もよろしく。オムツは変えたからやらないでよし」

そう言つと包丁でネギをとんとんと切つていいく。

千冬はランドセルからプリントやらノートを出して宿題をし始めた。

それを見ながらキャベツを上に投げて包丁で秘剣・千切り。

フライパンで炒めながら味噌汁を作る。

「んー・・・味が薄いかな?味噌味噌・・・つと

味噌汁の味を確認しながら味を整えて料理を作つていいく。
刻んだネギを味噌汁に入れると一回、一回、三回とかき混ぜて火

を止める。

切ったキャベツを皿に盛り、焼いておいた豚のしょうが焼きを盛り付けて完成。

「こ飯も炊けたから合拭きを持ってテーブルへ。」

テーブルをしつかり拭いて料理を並べる。

並べると千冬を呼ぼうとテレビ前に行くと千冬は一夏と遊んだ。

ポンポンと肩を叩いて千冬とテーブルに座ると茶碗に白米と味噌汁を入れて手を合わせる。

「「いただきます」」

千冬としつかりいただきますを囁きながら豚のしょうが焼きを食べる。「うん」「うまい。」

千冬を見るとパックパク食べており、嬉しそうにキャベツにドレッシングをかけて食べていた。

俺は空の茶碗に盛り盛つと皿米を盛ると一杯皿を千冬に渡す。

「取り敢えず弁当は作らう。何がいい?」

「あんまりひどいー。」

・・・一回田だけぞ・・・。

お前は年寄りか。

でもまあ、弁当の中身は決まつたな。
まずは千冬「要望のきんぴら」。そして定番の玉子にタマゴを
んウインナー、後は子供らしくハンバーグでも入れといつ。

うーむ・・・親父は違つが、姐さんとおやつさんは料理得意だから
らな・・・かなり鍛えられてるから何でも作れるが朝早く起きなき
やな。

小学校の給食で弁当いらなかつたから朝飯と晩飯だけよかつた
が弁当となれば早起きしなくては。

四季組にいた時は普通に朝五時に起床してたんだがな・・・。

夕食完食。皿洗いを再びやる最中に千冬を風呂に入らせる。

一夏はすでにドリームインしておつ、ベビーベッドで寝てこる。

「・・・遠足か・・・嫌な思い出しかない。千冬には楽しんでもら
いたいものだな」

そう考えると昔のあの記憶が蘇つて体がブルリと震えた。
あ、あれは・・・悪夢だったな。

そんなことはお構い無しに千冬は風呂から出て牛乳を飲んでいた。

・・・これ、親父の遺伝だろ。親父、風呂から出たら牛乳か日本酒を飲むのが好きだつたからな。

皿洗いを終えると昼に洗つた分まで乾燥機に纏めて入れてスイッチオン。明日の朝には終わつてゐるはず。着替えを持つて脱衣場に行き、入浴。

・・・ああ・・・昼の疲れが癒される・・・！風呂は命の洗濯？とか言つてたやつがいたはず。うん。じつして一日は終わるのであつた。

第参話（前書き）

修正しました。

本日は晴天なり。

気温、湿度共に過ごしやすい日であり、外で活動するにまつてここである。

少し肌寒いが、服をしつかり着れば問題はないと思う。

本日は千冬の遠足である。

る。場所は誰が決めたのか、動物園と水族館がある大規模な公園であ

「あー、あー」

「…………眠いんだよ一夏…………少しだけ寝させてくれよ」

「あー！あー！」

• • • • •

そして俺と一夏は家で留守番、とこりよつせこいつものよつだらけた生活をしている。

・・・一トとか言うな。主夫と言え主夫と。

・・・といつか一夏痛い。ペシペシ叩くでない。

今日の朝は千冬の弁当作りに早起きしたんだから眠たいの。

リビングのソファーに寝転がる俺の上ではしゃぐ一夏を睨たそりに見ながら一夏のペシペシを止める。

そうすると一夏はあーあー言いながら髪を再び持つてまむまむと口に入れて食べ始めた。

・・・一夏にとつて俺の髪は食い物なのか？前も俺の髪、食われて一夏の涎まみれだつたし。

・・・今度、昆布かわかめを渡してみるか。似てるし。

さてさて。時間があるので軽く俺の事を説明しよう。

まずは四季組。日本最大の任侠に生きる日本古来から存在する武士の血を継ぐ組織と言われる由緒ある一家。

その組長は代々“織斑”が受け継ぎ、もつとも力があるものが組長となると決まりがある。

そして四季組に生まれ、織斑の姓に生まれた者は名前に四季が入つている。

俺は春樹で“春”。妹の秋枝は“秋”。

千冬と一夏も“冬”と“夏”がある。

親父は冬^{あき}樹^{じゆ}で“冬”を持っていた。母さんは嫁いできたからないが似たような感じはある。

織斑家直属はみな、ある特徴を持つて生まれている。

それは類いまれなる才能。

親父にしろ、俺にしろ、何かしらの人外の才能を持つている。

俺は親父には劣るがあらゆる面で才能を受け継いだ。

おかげで四季組からはバグキャラと呼ばれるくらい、人類最強の戦闘能力を持つている。

親父が生きていたら親父が人類最強だが。

反対に、秋枝はあまり才能はなかつたが、普通の人なら才能があると言われる程度にはあった。

おかげで、四季組の頭のお堅い馬鹿のせいで秋枝は荒んでいたが。いつの間にか一夏は寝ているため、久しぶりにテレビでゲームをプレイ。

千冬と一夏が養子になつてから家事やらで忙しかつたから久しぶりだな。本当に。

「・・・・・なぜだ。中途半端にやる気が出ないぞ」

話は戻して四季組についてを少し話そつ。

親父で四季組九代目の組長であり、歴代最強の組長でもある。

現在の組長は代理組長で俺が受け継ぐべきなのだが、今はまだ戻る気はない。

四季組九代目の親父の息子である俺は組長にならねばならないのだが、親父の遺言で組長にならなくてもいいと言わっているからという理由もあるけどな。

親父は小さい頃に自由に生きられなかつたからせめて息子だけは。と自由にしてくれたのである。

これだけを聞けば美談だが昔の親父を思えば感謝する気になれない。

「うー

「やめやめ。一夏と寝とこ」

小学生の時の遠足で俺は山に行つたのだが、運の悪いことに山で熊に遭遇した。

小学生の時からずば抜けた運動神經で熊を撃退したが全治三ヶ月の怪我をし、入院することになった。

治つたのも束の間、親父は熊に負けるとは何事だ！と叫び、俺を最強の熊であるグリズリーとサシで戦わせた経験がある。

なんとか生き残つたのだが・・・全治半年の重症の怪我を負い、入院リターン。

死ぬかと思った。小学二年生である当時の俺はグリズリーと戦うのは恐怖以外の何物でもなかつた。

退院すると真つ先に親父に殴りかかつたが見事に返り討ち。再び入院して一躍ナースさん達の人気者になつた事がある。

退院 親父に殴りかかる 返り討ち 入院 ナースさん達のオモチャになる 退院と永遠にループしてたのが小学校の思い出である。

碌なもんじやねえな・・・やたらと女性に好かれるし。

中学に上がつてからは親父に勝つために親父の知り合いの道場で鍛えながら親父に挑んだが全戦全敗。

以前は骨を完膚なきまでに叩き折られたが中学一年生から折れなくなってきた。

俺の知らないうちにボロボロの姿が男らしさと中学のアイドル的な存在になつてたらしい。

中学三年生より道場の剣術を習い始める。

高校に上ると親父と互角に渡り合っていたが、親父は今の今まで手加減していたため、小学校の無限ループ再来。真操をナースさんに狙われる毎日を過ごした。

親父と喧嘩しながらも勉強は怠らずにクラストップ10に入るようにはした。

じゃねーと戦ってくれないし、飯抜きになるもん。

道場で剣術を習いながら部活の最終兵器として活躍。報酬はパン七個である。

高校を卒業すると大学には行かずに親父を叩きのめすために四季組の若頭となつた。

当時は日本のヤクザや外国のマフィア相手に暴れに暴れ、詐欺をしてる組織も潰して回つた。

銃弾の雨すら避ける俺を見て四季組がバグキャラ、“最後の侍”^(ラストサムライ)だなんて呼ばれ始めたのもこの頃である。

・・・結局、親父が六十七歳で亡くなるまで俺は勝つことができなかつた。

秋枝が駆け落ちした？心労で亡くなり、親父は四季組の全員に見送られながら逝つた・・・が。

絶対に親父、天国にしろ地獄にしろ、神や閻魔相手に暴れているイメージがあるからそれほど悲しんではいないけど。

前に神様相手に戦つたら勝てるかの？みたいに言つてたのを聞いたし。

「・・・親父、か・・・俺も親父なんだけどなあ・・・」

眠つている一夏を見ながりそいつと思つと親父の話を聞かせようか迷つた。

親父の話は普通の人には聞かせられないからな・・・と思つ。

俺は小さい頃から親父のチートっぷりを誰よりも知つてゐるからな。一夏や千冬に聞かせたら四季組の妙な雰囲気に染まりそうで怖い。

孫の顔が見たい！

「ぬおーー?」

いつの間にか一夏と熟睡しており、死んだはずの親父の声が聞こえると驚いて寝ていたソファーカラ飛び起きた。

「いたい・・・・・」

「ん?帰つてたのか千冬・・・・? いま何時だ?」

下を見ると千冬が額を押さえ涙田になつておつ、ジースと見てきた。

頭を撫でながら時間を確認すると午後五時。ビリヤリ面前から爆睡じたようだ。

千冬は帰つてきたばかりのようで寝ていた俺を馬乗りになつて覗いているところくり返り、痛みに堪えてるらしい。ちなみに一夏は千冬がベーベッドに乗せており、腹の上から消えていた。

偉い偉い。頭をさうじ簾でいやらわ。

「・・・はふう・・・お父さん、もう夕方だけ寝ていいの？一
夏もずっとお父さんの腹の上で寝ていたんだけど・・・」

「んあー、悪い。朝に早起したからつい、な・・・」

「うー。一夏、お腹が空いて泣いていたんだぞ？気を付けてよ
お父さん」

あー、それは悪い事をしたな・・・一夏には少し高めのミルクを
あげようか。

千冬は俺に撫でられながら、一夏の頭を撫でながら言つが反省し
なことな。あまり空腹にさせると成長に悪いつて親父が言つてたし
な。

拗ねた感じの千冬の要望、“やめーーーっと抱きしめて?”によ
り、背骨が折れる勢いで抱きしめる。

まあ、軽く・・・だが。人類最強の俺が本気を出したらスマッシュ
になるのは見えてるから。

「えつとねー今日の遠足は・・・」

「せつせつ」

抱きしめた後、千冬は楽しそうに遠足について話し出す。
動物園でライオンとじゃれた、ゴリラと握手した、水族館でペンギンを触った、イルカに餌をあげた。と話した。

・・・動物園のぐだりはツツコモをするべきなのか？

親父みたいになつてんじゃねーか。

「でね！たばねちゃんが弁当を交換しようってやつでね！美味しいつて言つてくれた！」

「それは嬉しいな」

「お父さん、料理上手だからね！」

「・・・今日の晩飯は奮発して刺身にするか。ホタテを中心にして」

「本当ー？」

千冬、小学生から刺身好きで特にホタテが好物な小学生らしからぬ小学生である。

誉められたのが嬉しいので奮発。まだ時間はあるので千冬と一緒に買い物に行こう。

ジャコでいいか。

そうと決まれば金だ金。財布には諭吉が數十人いるから余裕で買
い物はできるだろう。

部屋着であるジーパンに長袖のシャツの上にパーカーを羽織つて
から一夏のベビーカーを玄関から出す。
千冬と一夏と外に出ると鍵を閉め、ベビーカーに一夏を入れて寒
くないよう毛布をかけた。

「なんかいる？好きなもの一つくらい買ってやるぞ」

「……む～。ありそりやないよお父さん」

「考えとけ。じゃ行きますか

「お～！」

「あい～！」

ジャコに行き、晩飯の買い物をして千冬にホタテを食わせた。
ショッピング中は逆ナンが多かつたので疲れた。
なぜ女性に逆ナンされるんだ俺は・・・。

第肆話（前書き）

修正しました。

本日は晴天なり。

寒かつた冬も終わり、春、夏と季節は変わって暑い夏から涼しくなってきたこの頃。

我が織斑家では千冬と一緒に夏で楽しく過ごしております。

なんとなんと…今日は記念すべき日。我が息子、一夏の一歳の誕生日であるのだ！

「お父さん、これはいいでいい？」

「いいぞ」

「あハー…」

とこうわけで今日は家のリビングを誕生日仕様にして一夏を祝うこととした。

引き取つてから一年近く、千冬と一緒に暮らし始めたため、一夏はハイハイから立ち上がることができるようになっていた。少しは歩けるがまだまだといったところ。

去年の冬には千冬の誕生日があり、その時は一夏と同様、盛大に祝つた。

ちなみにだが、千冬は十一月七日、一夏は九月二十七日、俺は九

月十五日が誕生日である。

織斑家では生まれた季節によって名前を決めるのだが、俺は異端で夏に生まれたのに“春”を『えられた。

親父曰く、わしの親父と雰囲気が似てたから。らしい。

まあ、つまりは俺の爺ちゃん、八代目四季組組長の事である。顔は知らない。アルバムで見たことはあるが、会ったことはない。

「それよりお父さん？一夏のプレゼントってあるの？」

「ん」

「？・・・まさか、あれ・・・？」

一夏にとんがり帽子を被せながらあるものを指差すとそこには大量のラッピングされた箱が積み重なっていた。

千冬はそれを見て顔をひきつらせ、指を指していた。

・・・まあ、これは四季組勢からのプレゼントなんだが。
組長代理や昔に親父にお世話になつた奴等、おやつさん、姉さん、四季組の幹部メンバーが一夏に贈つてきたのだ。

若様にプレゼントを！つてな。

千冬の時もあこづら、一夏と同じくこのプレゼントを贈つてきただからな。

千冬が啞然としていたから予想なんかつかなかつたんだろうな。

取り敢えず中身を確認したら変なものが出ていたのですが
俺も呆れ果てた。

「ディスや、日本酒や、ナチャカ（拳銃）や、と供にあるおじやプレゼントがあった。」

それでは四季組に贈り返して贈った奴等を血祭りにしたが。

「……お父さん、また変なの入ってないよね？」

「……不安すぎる」

プレゼントの中には髪飾りや櫛など、千冬には合つものがあった
がどれも高級品のため、少しあれである。

他にも洋服や着物を贈ってきたがそれは大事に仕舞つてある。

準備を終え、プレゼントの口を千冬と眺めてみると不安のせいか、
プレゼントから真っ黒なオーラが噴き出している気がする。

「……お父さん、やつはよ

「のうに譲る」

「……」

手をプレゼントに向けながら俺達は見つめ合ひて固まる。

「……じやん、けん！」

「ほん！」

「ほおおん！！」

俺
バ
ー。
。

千冬子

勝者
千冬

「・・・・・神は残酷だつ！！」

「やつた！去年みたいな事はしなくて済む！」

「・・・変なものを見つけたらもれなく地獄への片道切符を贈つてやるや。オプションで本気のグーパンだ」

喜ぶ千冬に俺はげんなりしながらプレゼントの中の中を調べる。
・・・うん。去年の千冬のプレゼントの中にパンダの子供とかい
たのは驚いたな。

一時、ワシントン条約でしょつぴかれそうになつたし。

四季組、日本の警察には不可侵の組織だが国際組織相手ではどうにもならぬ。

国を巻き込んだ陰謀をしたテロリストとかマフィアを潰した借りはあるがワシントン条約じゃあ・・・ねえ？

「・・・案外マトモだな」

「あれ?」れつておしゃべり?」

「他にはオムジやひなんやひベーグッズが多いな」

プレゼントを開けに開けるとベーグッズしか出でこない。
今年はヤバいものはないのか?と思にながらせりてプレゼントを確認していく。

七割方終わると合計120ほどの中のプレゼントが開けられた。
その中には浴衣やらなんやらと着るものや将来に使いそつむのがわんとかってきた。

去年みたいなドスやら刀とかはなくて安心・・・したところへ
んでもないものが出了た。

「・・・マジですか?」

「金ぴか・・・・・」

やたらと重い箱を開けると金塊がぎっしり詰まっていた。

馬鹿か?あいつらは馬鹿なのか?一夏に金塊あげてなんになる?
まさに豚に真珠、子供に金塊だらうが!」

「返せや。いろんなのめりつても役に立たん。贈り返せ贈り返せ」

「・・・はあ・・・重い・・・」

千冬は両手で金塊のひとつを持つと嘆息しながら元に戻した。取り敢えずその金塊の山はきつちり返すこととした。お詫びに地獄への片道切符付きで。

んー、祝ってくれるのは嬉しいがもうやめさせよう。一夏が大きくなつてこれを見たらグレるかもしけんし。

某大晦日の恒例のあれ（ガキ使）に出る引き出しを開けるみたい
なドキドキ感はいらん。

「アーティスト」

「ん？」

下に軽い衝撃があり、見てみると一夏が小さな体で足に抱きついていた。

上田遣いで俺を見てきたため、抱き上げて一夏と田を呑わせる。

「どうした一夏」

「お、なか・・・しゅいた！」

「・・・さすがは親父の孫・・・成長が早すぎるな」

「」の一年で一夏はかなり成長し、古っ足らしだが少しは蝶れる。
第一声は“おとうじゅ”だから俺は舞い上がり、千冬は地味に落ち込んでいた。

「うやうやしくかにお姉ちゃんって呼ばれるのを楽しみにしてたらしい。まあ、今は“ねえちゅ”で千冬を呼んでいるけどな。千冬のやつ、俺にかなり面倒してた。」

今日は運がよく、日曜日。なので千冬と一緒に遊びながら一夏の誕生日の準備をした。

ミルクを飲んでいた一夏は離乳食を食べるようになり、もう少しで三人でケーキを食べられそうでパパは樂しみです。

「・・・よし。千冬、それから食べようか。時間もいい頃だしな」

「わかったー私はお皿を出すー。」

「みやーーー。」

「一夏も楽しみか?でもまだケーキは食べさせられないからな・・・来年辺りには大丈夫だから。な?」

「みやーーー。」

ズルいぞ！と言いたいのか、一夏は手を上げて叫ぶ。

一夏はまだ“おとうじや”“ねえぢや”“おなかすいた”しか喋ることができない。

余談だが、おなかすいたは千冬を真似したようで千冬はかなり気まずそうであった。

お前、腹ペコキャラだったか？

それは置いといで。ヤバいので贈り返すプレゼントと保存するプレゼント、今から使う予定のプレゼントと分けると邪魔にならない場所に置く。

それから一夏をベビー用の椅子に座らせると千冬もまた、椅子に座る。

「一夏はこれで千冬はこれ。後は……これでいいか」

「うわ……またす……」

「あいしーーー！」

「当たり前。息子を祝うんだから遠慮はせんぞ俺は」

「でも一夏は食べられないよね？」

「・・・・・・・」

千冬のメスのように鋭いシッコ!!により、俺沈黙。

それを見た千冬はハツとして慰めるようにわたしと手を振る。

・・・確かにそうだけじゃ・・・祝つべらこいいだら? 息子のはじめての誕生日なんだからわ・・・。

「・・・で。お父さん? また食べないの?」

「・・・・・・いや。俺は食べなくとも大丈夫なんだが・・・」

「駄目ーしつかり食べてよお父さんー」

そんなこんなで一夏のバースデーケーキの火を千冬が代わりに消すと一人で料理を食べ始める。

しかし、千冬のジト田により空気が凍るのを感じた。

ビシッと俺を指差すと千冬は誕生日用の手羽先をぐいぐいと押し付けてくる。

正直、俺は吃るのは好きじゃないんだがな・・・。

一日に一回の食事で持つし、二一ト生活では丸一週間も食べなかつたことがあった。

そのせいで知り合いや四季組のみんなに心配されたが死なないからいいだろ? って思う。

少食なんだよ。俺はさ・・・。

だが、娘となつた千冬により、食事は必ず三食食べるよ! と言われた。

おかげで58? だつた体重が67? まで増えてしまつたし・・・。

「・・・めんべくさいな・・・食わなくても死なないから俺は

「駄目！」

昔に親父にグリズリーとサシで戦わせた時に、ジャングルやら雪山に放り出されたせいでサバイバル技術がプロ以上になり、食事も取らなくていいようになつた経歴がある。

そのせいか、親父が死んで二ート生活をしていても餓死はしなかつたのだ。

なのに戦闘力は変わらずといったまさにバグキャラなのである。俺は。

全盛期時には身長は変わらないが体重は65?と痩せ体型ではあるが体は引き締まる。といった人外の肉体を持つていたのである。

これは親父の遺伝であり、なぜかを一度聞いてみると。

「気合いだ」

と理論完全無視なお言葉をいただいた。

取り敢えず、見た目とは反して俺の肉体はスゴい。と思えばよし。付け加えるなら人類の神祕を超えた神祕と思え。

「ほらー！もつと食べてよー！」

「や、やめ・・・・食えない・・・・！」

「 もやまは 」

・・・ま。いつか。こんな誕生日も想い出になる。
一夏。誕生日おめでとうな。これからもよろしく。俺の大事な息
子よ・・・。

修正しました。

本日は曇りのち雨なり。

空は灰色に染まり、雨はポツポツと降つてゐるが俺はとある場所に來てゐる。

ちなみに今日は平日。千冬は学校、一夏は幼稚園に入つて預けていれる。

「採用」

「はやいなおいつ！」

とある場所、それは・・・

「じゃあ明日からお願ひしますね。制服とかはこちらで用意しますから。あ、休日は水曜日と土曜日に日曜日でいいですか？」

「ええ、まあ・・・」

「大変ですねえ・・・二十歳で子供一人を・・・」

「ちょっとストップ。・・・年齢、書いてますけど・・・読みました？」

「なぜ嘘と呼ばれなければならないんだ・・・嘘言つても仕方ない
でしょう」

静かなオフィスにて面接官の女性の甲高い声が響き渡った。

おわかり？俺は現在、とある会社の面接に来ております。仕事内容は清掃。姐さんとおやつさんのツテで探してもうつて今日、こうして来たわけである。

「じゃあ今の通りにお願いします……ところで今日の夜はお暇ですか？よかつたら私とホテルに行きません？」

「死ね」

会社の正社員だから、部長だからと遠慮はしない。食事ではなくやううつと言つて面接官の女性部長に笑顔で“死ね”と言つた。

・・・なのに何かに悶える姿ははつきり言つて気持ち悪い。

この女性、^{アマ}真性のドMなのか？

説明は受けて大体は理解したので清掃員用の備品庫に向かうこととした。取り敢えずこの部長とは関わりたくない。

与えられた仕事はビルの清掃やトイレの清掃に備品補充。

「まあいいか」

めんどくさいがやううつか。姐さんとおやつさんがわざわざ紹介してくれた仕事だし。

仕事は明日からなので一夏を迎えて行くか。

親父、移動。幼稚園到着

「あ、おとうやんー」

「よつ」

「」「こんにちは織斑さんー」

「どうも先生。一夏を預かってくれてありがとうございます」

「は、はう・・・」

一夏がいる幼稚園に着くと真っ先に一夏は俺を見つけ、抱きついてきた。

そこに一夏を担当する先生が挨拶をしてきたので返す。

するとなぜか女性の先生は顔を赤くして俯いてしまった。

「あれ？せんせー、かおあかいよ？」

「な、なんでもないわよ一夏君ーー？織斑さん、これー伝達用のプリントです！」

「はあ・・・・ゞりも・・・・」

「で、では私はこれにて失礼しましゅー」

わたわたと先生はプリントを俺に渡すと建物の中に走っていった。それを俺と一夏はそれを見ると顔を合わせて同時に首を傾げた。

・・・なんなんだ？

「・・・帰らうか

「うんー」

帰ることにした。

帰る途中で一夏と幼稚園の君は絵が上手とか、ちゃんはかわいいとか、先生がよく俺の事を聞いてきたと話してくれた。なんで先生方は俺の事を聞いたんだ？なんかしたか俺は？

また女性に好かれるとか・・・。

「でねーほつときちやんがおれにたまじやきをくれたんだよー。」

「ほー、ほつときちやんねえ・・・可憐いのか?」

「うふーおとこみたいにかわいいよほつときちやんはー。」

せつときから“ほつときちやん”的事を話す一夏は楽しそうだった。
好きなのか?と聞いたら好きって何?と予想外の返答がされた。
しまった・・・一夏はまだ幼稚園だからそういう感情は理解でき
ないのか・・・。

まあ、ゆつくりと教えていくか。

・・・それと一夏、女の子に男っぽいとかはやめる。つて姉さん
が言つてた。

「で?そのほつときちやんの上の名前はわかるか?」

「ん、ん、ん〜・・・し、しの・・・しの・・・しののめ?」

「しのめ東雲?また変わった名前だな」

織斑も大概だが。

それより東雲と似たあの姓を聞くとなんか嫌なんだよな。

昔に世話になつた剣道場の師範代の姓が似たような感じだつたし。

何かと俺が師範代、ジジイの道場に入つた頃から田の敵にされて毛嫌いされたし。

まあ・・・返り討ちにして全戦全勝だけどね。そのせいでもひて田の敵にされるとなるんだが・・・。

「・・・まあいいや。ほつわちゅんと仲良くな?」

「わかった!」

話を切り上げて一夏と手を繋ぎながらマンションのエレベーターに乗る。

話しながら歩いて「すぐ」着くもんだな。今まで、一人がない間は家にいることが多いし、こんな風に話すこともなかつた。

新しい日常、千冬と一夏と暮らす人生は新鮮で楽しいものだ。
二人はこんな俺を“父”と呼んでくれるのが嬉しく思つ。

「おとうさん、ちふゆねえはまだかな?」

「もう帰つてるだろ。時間も四時回つてんしな・・・で?今日は何が食べたい?」

「ハンバーグ!」

「よしきた」

一夏は喋れるよつてなると“おえひや”から“けふふねえ”と呼ぶよつてなつた。

千冬も満更でなべ、千冬姉と呼ばれるのは嬉しこみたいだ。

まあ・・・それと同時に千冬も俺をお父さんから父さんと変えたから少し寂しい。

一回、パパと呼ばれてみたかった・・・。

「ただいまー！」

「あ。おかえり一夏、父さん」

「ただいま。早かつたな」

「うん。今日は特に用事も無かつたから・・・でも明日は委員会があるから遅くなりそうだよ」

「五時くらいか？」

「それくらいかな？もつかよつと早く飯もあるけど」

玄関まで迎えに来た千冬の頭を撫でながらリビングに入ると一夏は真っ先に冷蔵庫を開けてケーキをかぶりついた。

あの馬鹿め・・・手を洗つてから食えと言つたのにそのまま食べやがつて！

取り敢えずケーキを食べる一夏に拳骨をお見舞いする。

頭を押さえて踞る一夏を洗面所に首根っこを掴んで猫のように連れていき、手を洗わせた。

「いたい・・・いたいよおひわせ・・・!」

「黙れ。帰つたら手を洗えと言つただろうが。風邪をひいたらどうすんだ阿呆」

「うん、おまえもおもしろいよ！」

「……残念ながら一夏が悪い。父さんは毎田手を洗つる」言つていただろう?」「

手を洗わせるとテーブルの椅子にそれぞれ座ると一夏は半泣きでケーキを食べ、千冬は学校からもらつたプリントをズズイッと渡してきました。

えーっと・・・二者面談? またやるのか?

「それで父さん、面接はどうだったの？」

「開始5分で採用された」

「…なんで？」

「俺に聞くくな」

「？」

千冬はマジかよ？みたいな顔をし、一夏はフォークを口にくわえたまま首を傾げていた。

まあそつなるわな。開始五分で採用なんて普通は不採用だと思つよな。

なんだだらうな？まさかとは思つが顔で選んだ訳じやないよな？あの女性部長さんは。

俺の顔、童顔以外に特徴ないはずだぞ？

「・・・いやいや。カッコいい顔してるのこれはないない

「なんか言つたか？」

「なんでも。それより父さん？今度の田曜田に用事があるんじゃなかつた？」

「ん？実家に顔出す予定だがキャンセルしたからな」

「・・・や、それなら友達の家に遊びに行つていいかな？」

「いいぞ。友達は大事にしないとな・・・誰の家に行くんだ？」

「束つて同じクラスの女の子なんだけど」

「ああ・・・千冬がよく話していた束ちゃんか・・・」

束ちゃんとは千冬が付き合つてゐる友達らしい。

小学校なのに頭がいいけど孤立していたから話し掛けたところは千冬から聞いている。

前に遠足でオカズ交換したあの子だな。間違いない。

・・・お父さん、優しい子に育つて嬉しい。

友達が多い千冬だが、あんな風に楽しそうに話すのは初めてのため、仲良くはしてほしいものだ。

千冬の才能の影響か、友達はたくさんできるからな・・・特に下の子は千冬を“お姉さま”とか呼んでゐるのを先生から聞いた事があるし。

危ない教育されてる訳じゃないよな?

「気を付けてな。家に入つたらお邪魔しますはっきりと言えよ

「わかつてゐる」

「おとうさん…おれもほつとちやんとあそびたい!」

「・・・んー、また聞いておくよ」

住所や名前は知らないが担当の先生に聞けば教えてくれるだろ。

しばらく話すと俺は晩飯の用意をする事にした。

一夏も手伝いをしているため、エプロンをつけて一緒に料理中。千冬はリビングのソファーに座つてテレビを見ている。

だつて・・・千冬が料理をすると暗黒物質^{ダークマター}ができるもの。

最初は頑張つて教えたのだが、きちんと材料とかも調理も完璧なのにできるのは暗黒物質^{ダークマター}。

こんなとこまで親父に似なくていいのに・・・と思つ。

親父は料理や家事は壊滅的だつたからな・・・。

反対に母さんは料理や家事は完璧であり、俺はそれを遺伝している。

「ちふゅねえ、せなかからなにかでてる」

「・・・見るな一夏。俺でも見ていて辛い」

リビングでテレビを見る千冬の背中には年に似合わない哀愁感が漂つっていた。

・・・親父より秋枝の遺伝かもしれんな。あいつも家事は壊滅的だつたし。

涙を誘われるので千冬のハンバーグにはチーズを入れておひつ。

案の定、嬉しそうにハンバーグを食べる千冬でしたとさ。

第陸話（前書き）

修正しました。

本日は晴天なり。

少し雲が出てきているが雨は降らないようなので洗濯物を干して
いる。

今日は千冬に言われ、滅多に出ない外に一夏と外出している。

俺がとある会社の清掃員として働き始めて三週間ちょっと。
千冬は小学五年生、一夏は幼稚園に馴染み始めている。
まあ、一夏は月、火、木、金しか幼稚園には行かないが。

「おとうさん、ちふゆねえはいつかえてくるかな？」

「んー、むう少しじゃないか？ 時間的にもそろそろ学校は終わる頃
だし」

俺は左手、一夏は小さな右手で手を繋いで歩きながら右手でポケ
ットから携帯を取り出して時間を確認。

現在は午後三時半である。

「……迎えに行くか？」

「……あとなにかたべたい。」

「な、口うけなんかを食べ歩きするか。場所は・・・商店街の
おひなちゃんからおひつ」

「口ッケ！？おれ、だいすきなんだ！」

「おひめ。じょあ行ひつか。千冬の分も買つてな」

「うん！」

一夏は三歳。大体は喋れるようになり、歩くことも出来るようになつたので、こうしてたまに散歩をするのが新しい日常になつた。散歩の途中にて食べ歩きをするのが一夏の楽しみになつてたりする。

・・・千冬に言われてから外に出るようになったりまたもや体重が増えた。原因は食べ歩き。

も苦労した。

昔から親父に体重はなるべく減らしておけ。と非人道極まりない発言と肉体的用語による発言により、染み付いた習慣になりつつあ

できるだけスピードが出るよつこと、絞りまくつたせいだな。うん。

千冬のおかげでもうそれは無くなつたがまだ断食の習慣は直りそうにない。

「能くらむかとて、おこなはれ。」

「・・・ああ、すまん。聞いてなかつた」

「 もひーちゃんときこでよ！おれ、しょひりこはあふねえやおと
うかとをまもれるヒーローになりたいんだよー。」

「ん。なれるんじやないか？・・・親父の遺伝なら間違いなくチー
トな戦闘力ありそだじ（ボソツ）」

実際に俺は一夏の年、いや、五歳から才能の片鱗が現れたことが
ある。

本格的にそれが目覚め始めたのは遠足の熊戦。そこから急激に伸
びて今じゃ、親父に次ぐ人類最強なわけだ。

一夏はふんふんと怒つてこるようだが「ロッケを買って機嫌
を直した。

「じゅあ行け」つか

「おーー。」

所変わつて千冬が通う小学校の校門。一夏と手を繋ぎながら待機。

「・・・ちふゅねえ、まだかな？」

「もう終わつてるはずだからもう少し待てば来ると思つよ」

もむもむとコロッケを食いながら千冬を待つ親父と息子。視線が
バシバシ感じます。

「・・・あーちふゅねえだー！」

「ん？」

時間にして七分待つていると校舎の玄関から千冬と変わつた髪色
の少女が出てきた。

・・・?千冬、なんか嫌そうな顔してるな?ビリしたんだ?

「…………おとひかえ、あいつだれ？」

「…………なんだあのガキは……」

千冬と少女は足早に玄関から出でこちから歩いてくるが後ろからニヤニヤとここからでもはつきりとわかる氣持ち悪い笑いをしたガキが追い掛けていた。

・・・取り敢えず殺すか。

「おこ千冬ー」

「…………父ちゃん、びっくりする。…………一夏まで」

「びっしたんだ千冬？」こいつ、お前の知り合いか？」

「あ、？ガキ、年上には敬意を払え。親から教わらなかつたのか？」

千冬を呼ぶとランドセルを持ち直して少女と走つてくると後ろからまたもやガキが追い掛け、俺を指差しながら千冬になれなれしく話していた。

千冬も少女も嫌そこしてるのがわからないのかこのガキは？

一夏を肩車すると千冬の手を取りてそこから離れるように歩き出す。

千冬は少女の手を取つて歩くがガキが回り込んで邪魔をしてきた。

「おじオッサン、俺の千冬になれなれしくしてんじゃねえよ。てめえ、誰だ？」

「・・・喧嘩売つてんのかクソガキ。年上には、敬意を、払えと、親から、教わらなかつたのか？あんまりしつことお前の親に話すぞ。うちの千冬をつけ回してるつてな」

「はつ！嫁と話していくて何が悪いんだオッサン？俺は選ばれた者なんだから向をしようつと勝手だらうが」

なんなんだこのクソガキは・・・！いいよな？殺してもいいよな？親もろともぶつ殺していいよな？

プルプルと震える手を見た千冬が慌てて止めるが止めるな。殴り殺してくれる。

「おじオッサン。その手はなんだ？俺を殴つていいのか？俺は“如月コーポレーション”の御曹司だぞ！」

「・・・・・・如月コーポレーション？・・・あいつの息子か・・・」

田の前でドヤ顔をしてるクソガキを無視して顔を改めて見てみる。
・・・似てない。金髪に黒と赤のオッドアイだなんてまるで似てない。養子を引き取ったのか？

如月コーポレーションとは日本有数の大会社のひとつではあるが、残念ながら四季組の下にある会社である。

そここの社長とは親父を通して知り合いのため、顔は知つてゐる。

・・・さて。如月コーポレーションの御曹司と言つていて四季組組長息子である俺の方が立場は上。どうしてくれようか・・・。取り敢えず潰す。教育してないガキもろとも路頭に迷わせようか？あん？

「父さん、もういいから行いつ。こんな奴を相手にしても時間の無駄だよ」

「・・・同感だな」

「いまだにドヤ顔をするクソガキを押し退けて一夏、千冬、少女は学校から離れる。

「おいオッサン！俺の千冬に手を出すなど・・・」

「ああ、クソガキ。自己紹介がまだだったな・・・」

ガシッとクソガキの頭を掴むと顔を覗いて低い声で齧るように言う。

「織斑春樹。千冬の父親だ・・・次に千冬に近付いたら・・・わか

つてゐるな?」

「なつ・・・・! 千冬に父親はいないはず・・・ぶべつー?」

クソガキを離すと尻餅をつぐ。
その間に二人を連れてそこから離れると通学路を真っ直ぐ通り、
帰路につぐ。

「なんであんなクソガキと会つたんだ?」

「知らない。転校してきた時からなれなれしくしてきただから」

「・・・なぜ相談しなかつたんだ?」

「最初はただ単に話をしたいだけだと思つた。でも転校して一週間
経つとあんな風にエスカレートしたんだ・・・」

帰路、商店街を通る道で俺は千冬から話を聞いている。
あのクソガキは一ヶ月前に転校してきたよつて千冬を見た時から
何かとつけ回したりしているらしい。

取り敢えずそれを学校側に電話しておいた。
仮に如月コープレーションから圧力が掛けられても潰すから問題
はない。

後悔しろ。俺の子供に手を出すやつは皆殺しにしてやるよ。

「それで・・・君は千冬のお友達かな?」

「いのちごよ。ちーちゃんの父親だからって『安心』話しかけるな」

ピキッ

千冬の隣を歩く紫色の髪をした少女に話しかけると拒絶される。
罵声はプラスアルファ。

「束ー！」めん父さん、束は人見知りが激しくて・・・

「イインダイインダ。オレハオコツテナイカラネ？」

「おとうさん、なんかへん」

「ナニカイツタカイチカ？」

「なんでもありませんぐんぐんー！」

ピシッと敬礼する一夏。失礼だな・・・俺はイツモドオリダゾ？

千冬は紫色の髪をした少女に何かを話しているが、俺とは違つてしつかり話を聞いていた。

・・・なぜだ。千冬の才能の毒牙にやられたのか？

「いいか束？いくら束でも父さんを馬鹿にしたり、無下にすむ」と

は許せない。私は父さんが好きだし、尊敬してるからな

・・・千冬、父さんは嬉しくて涙が出そうです・・・。

今日はシースーだ。特上のシースーを注文しよう。

「・・・あいつが・・・ちーちゃんを・・・」

「む? じた束?」

束と呼ばれた少女は俯いており、千冬が話し掛けるとガシッと肩を
掴む。

髪が垂れてるため、顔は見えないがこれを俺は知ってる。

姉さんの病みモードの空氣だ・・・。

と、トラウマ・・・トラウマがああああああああああつーーー!

「た、束? 痛いんだが・・・」

「ちーちゃん」

「い・っ・・・」

「束さんはね。ちーちゃんが大好きなんだよ。他の奴なんてどうで

もいいくらいにだよ？あ、篠ちゃんは別だよ？束さんはちーちゃんと篠ちゃんがいれば地球が滅んでも人間が死んでも構わないんだよ？あ。でもそれじゃあ地球には住めないね。ちーちゃん、束さんと篠ちゃんと宇宙に行こつ。誰もいないうちーちゃんと篠ちゃんと束さんだけで一生一緒に暮らそう！できたらちーちゃんの子供も欲しいな。男の子はいらない、女の子が一人欲しいよ。あ、大丈夫だよ。ちーちゃんの愛があれば束さんは妊娠できるからね！んー、少しだけ待つて。束さん達が学校を卒業するまでには宇宙船と人類を滅ぼすウイルスを作るから。でも核もいいかもね。それなら綺麗さっぱり消えるから・・・ウフフフフ。ちーちゃん、君は・・・束さんだけのものだよ・・・？

・・・百合か？なんか姐さんよかは軽い感じはするな。

「お、おとうさん」わい・・・・

「ああ大丈夫大丈夫。怖くない怖くない

束ちゃん・・・だつたか？見事に歪みに歪んでるな。

姐さんの病みモードもあれだがこの子も似たり寄つたりだな。

まさかこの年でヤンデレとは・・・千冬の将来真つ暗だな。

友達がヤンデレとか波瀾万丈の人生しかないと。これ、経験者のアドバイス。

「だからね」

「・・・ん？」

束ちゃんは俺の田の前に立ち、狂氣を孕んだ虚ろな田で俺を見てくれる。

・・・似てこる。かつての俺のよつて世界から認められなかつた（・・・・・・・・・）時と同じ田をしてこる。
そして・・・母さんが死んでから絶望してた俺の田と。

「お前を殺して・・・ちーちゃんをもひつよ」

ならば・・・俺は親父にしてくれたよつての手にも見せよつか。

例え、どんな人に違つてはあれども、みんな一緒にだつて」と
をな・・・。

「・・・面白い。俺相手にそこまで書つとはな・・・いいぜ。相手になつてやるよ・・・“束”^{たばね}」

「氣安く名前を呼ぶな！ちーちゃんに呼ばれるためだけにある名前なんだ！」

「と、父さんー？」

「心配するな。俺の事は知つてゐるだろ？死にやしないわ」

これが・・・後に世界を変える天才科学者となる“篠ノ之東”との出会い。

ファーストコンタクトは最悪だが、将来には“天災コンビ”と言われるのはまだ先。
そして“天災夫婦”とも言われ、娘や乙女に命を狙われるのもまだ先。

第3話（前書き）

修正しました。

本日は雷鳴轟く嵐の日なり。

外の空は雨と雷がどしゃ降りで出られず、家にいる奴もいるだろ
う。

ニュースでも台風つて言つて警報が出でおつ、外出は控えめのよ
うにと放送されてる。

そんな中、俺は・・・。

「あああつーまたやられたかつー」

嵐の中、港にあるコンテナなどがよくある倉庫の中に頭を掻きな
がら立っていた。

周囲には「」を繩張りにする不良達が倒れている。

こんな状況になつているのは彼女、束の仕業である。

彼女と出会い、宣戦布告をされながら早五ヶ月。彼女にあらゆる襲
撃を受けている。

十一月に出来つてから五ヶ月が過ぎたため、千冬はまたひとつ年
を取つた。

今月は四月。だがそろそろそれも終わつしつである。

「・・・取り敢えず帰るか。懲りたらもうシャブ（覚醒剤）なんか流すなよガキ」

「うう・・・くそが、てめえ・・・誰なんだよ・・・」

「名乗る必要はない」

そう言ひと倉庫の大きな扉を開けて嵐の中に立つ。

彼女はあらゆる手で俺を「生き者にしよう」とし、今回は覚醒剤をばら蒔ぐグループを挑発して俺を殺すように仕組んだ。
返り討ちにはしたが、今回でこのよつた手は七十八回目である。
毎回毎回彼女が誘拐されたと嘘をついて倉庫や廃ビルに行くようにするよつた事を思いつく彼女の頭脳は凄いな。

・・・そのせいでも鈍っていた体を鍛え直されたから全盛期の実力が戻り始めている。

ん？どれくらいかつて？取り敢えず大型車を殴り飛ばせるんじやないか？

全盛期には戦車を素手で破壊できたから鈍りに鈍りまくったな。うん。

嵐の中、走りながら飛んでくる街路樹を蹴り飛ばしたりする。

「・・・俺もお人好しだな・・・嘘だとわかつても動くからな」

ため息をつきながら血弾を手に指して走る。

「一か雨凄いな。ジャングルのスコールみたいだな。

・・・懐かしいな。親父に連れられて鍛えた時もジャングルには行つたな・・・おかげで半端ないサバイバル技術が身に付いたけど。

他にも気絶してる間に親父にイカダに乗せられて太平洋に放置されたこともあつたな。

・・・鮫、怖い。

「ただいま

「おかえりおとうさん・・・わわわっ、おとうさんびしょぬれー!ちふゆねえー!」

「なんだ一夏、今私は・・・と、父さん!?なんでびしょ濡れなんだ!?一夏、タオルタオル!」

「わかつたー!」

「あ、ストップ。風呂に入るからー!」

家、マンションの自宅に帰ると案の定、千冬と一緒に慌てたようにバタバタと走り回る。

それを苦笑しながら見てびしょ濡れになつた靴を逆さまにしてぶら下げる乾かす。

ダバーッと水が流れ出て玄関に水溜まりができた。

びしょ濡れのまま、風呂場に向かうと廊下に水が溜まつしていく。それを干すと一夏が拭こうとするが自分でやると言い、脱衣場にて濡れた服を全部脱ぎ、洗濯機に放り込んで風呂場に入室。温かいシャワーを浴びながら今日の出来事、彼女について考える。

彼女・・・束は頭がいい。それも同年代より遙かに、大人よりもそのせいで友人や身近な同年代の子と距離を置かれてるのかもしれない。

実際に千冬から聞くとクラスでも孤立しているらしいしな。いじめもあつたようだし。

人は自分と違う他人を嫌いする性質があるからな・・・束もそれに当てはまるのだろう。

・・・似ていて、な・・・昔の俺に。残酷なほど、切ないほど、何もかもが、全てが俺が悩んだあの日と。

「・・・親父・・・俺はあの子を助けられるだろうか・・・

かつて親父と姐さんが助け出してくれたあの日・・・母さんが死んだあの日からの地獄から。

母さんは生まれつき、体が弱かった。

でも心は強かった。親父はそこに惚れたと言つていたが今思えば母さんほどの女性は今まで見たことがない。

俺はそんな母さんが好きだった。気高く、優しい母さんが。そんな母さんに甘えた俺は信じられなかつたのだろう。

母さんの突然の死。

死因は教えてくれなかつたが体が弱かつたせいで死んだと僕弟から聞いた事がある。

まだ四歳の俺は信じられなかつた。母さんの部屋で顔に白い布を乗せられた母さんが寝ているのは。

子供ながらに俺は理解してしまつた。

母さんは・・・もう帰つてこないと。

それが信じられなくて、嘘だと思いたくて泣いた。延々と泣いて暴れて・・・。

その日から俺は誰も信じられなくなつた。部屋に閉じこもり、飯も食べずにつづつ。

親父や僕弟の皆は何かと手を尽くしてくれたが俺は母さんの死が受け入れられなかつた。

「・・・なんで俺はあんなに塞ぎ込んだんだろうな。親父や姉さんもいたのに

苦笑しながらシャワーを止めるといき場から出てタオルで水気を拭く。

千冬か一夏が用意したのか、着替えがあり、それをズボンだけ着るとタオルを肩に掛けてリビングに入った。

「あ、出た・・・父さん一ちゃんと服を着てよー。」

「いいじゃねえか別に。風邪をひくわけじゃないし」

何かを読んでいた千冬は顔を赤くして服を着ると言つてきた。
前までは一緒に風呂に入つてたのにな。と思いながら冷蔵庫からビールを取り出して一息で飲んだ。

あの日が変わり始めたのは姉さんと出会つた日からだったな。

『やあはじめまして。君が春樹くんかな? ボクは。よろしくね?
?』

そう言って姉さんは笑いながら握手をしてきたが当時の俺は気に入らなかつた。

その笑顔が、母さんとダブつたから・・・。

俺は拒絶し、姉さんを殴つた。

でも姉さんは殴られても止めようとせずにただ俺に殴られ続けていた。

『フフフ・・・君がボクを殴って気が晴れるなりいくらでも殴られてやるさ。君のお父さん、冬君に頼まれたからね』

そう言つ姉さんにまたも母さんがダブリ、辛くなつた。

部屋からは出なかつたがその時は怖くて、母さんがいなくなるような気がして家から飛び出した。

無我夢中に飛び出したため、迫りくるトラックに気付かずに走っていると姉さんに助けられた。

最初は何があつたかわからなかつたが姉さんが俺を抱きながらコンクリートの地面に寝ていたのを見ると親父達が駆け寄ってきたのを見た。

・・・そういうえば親父のやつ、トラックを海に向かつて蹴り飛ばしてた気が・・・。

後から聞いたらあのトラックの運転手、俺を狙つた刺客だつたみたいだが・・・。

と、とにかく！姉さんは頭を少し打つだけで命に別状はなかつた。

簡単な検査で退院した姉さんは真っ先に俺のところに来た。

『春樹くん、君は大丈夫だつたかい？怪我はなかつたかい？』

その時の姉さんは俺が最後に見た母さんの優しい笑顔をしていていた。

それで感極まって俺は思にっこり泣いた。枯れたと思つた涙を流した。

姐さんは何も言わずに俺をあやしてくれ、それに甘えた。

まあ・・・それが俺が体験したこと。

彼女、束は俺とは違うが似たような苦しみを持っているだひつ。

母さんという支えを失つた俺、本当の支えがない束。似ている。あの様子から、両親から愛されてないかもしない。

「それより父さん、何してたの?」こんな風の中で傘も差さずこ

「傘は飛んだし、仕事があつたし。お前らは休みでいいな・・・。というわけでハツ当たりに今日の晩飯は、『ローヤチャンブルーオンリーだ』

「え~! またあのにがいの! ?」

「理不尽だぞ父さん! せめてご飯を付けてくれ! 」

「おかゆな。おかゆ

ギヤー・ギヤー叫ぶ千冬と一夏をにじめした顔で見ながらテレビをつけた。

嵐の影響か、見にくかったがコースは見れた。

「・・・なんじゅうじゅうへ。」

「えー、こんなのよりあいこぼつーあこぼつがみたいー。」

「人が湖を走るのか・・・？そんなの父さんくらいじゃないのか？」

「千冬、お前は『アヤチャンブルー』と納豆を混ぜたものを食え

「！」めんなさい。私が悪かったです」

深々と頭を下げる千冬。そんなに嫌か。親父はそんなゲテモノ料理を俺に食わせたことがあるんだぞ。

『あ、これですー！』これが湖を走る女性です！』

「どうせひだり。こんな悪戯を誰が信じるんだ馬鹿野郎

「・・・でも父さんならできるよね？」

「むしろ海を走れるぞ俺は。密漁船を沈める時にやったことがある

沈黙する千冬に訳がわからないといった一夏。

俺は一本目のビールを飲みながら再びテレビを見るとその女性がインタビューされた映像が映し出され・・・。

『やつほー。春君、元気かなー?』

「
ブ

ツ
！
「

「うわっ！？」

「ひやつ！？」

そこに映し出されたのはさつきまで思い出していた姐さんだつた。それを見た俺は口に含んだビールを盛大に吹き出した。

!? な、な、な、な、な、なんで!? なんで姐さんがテレビにつ

・・・よくよく見ると映像提供口シア某局と書かれていた
まさか姉さん・・・ロシアでまたやつたのか（・・・・・）？

『春君、元気かな？できたら連絡ほしいなー！ボクに君の声を聞かせて？』

・・・あの、誰ですかこの人は?』

キャラスターが戸惑うが仕方ないだろう。

姉さん、別名は“理不尽女王”だからな。下手に干渉すると心がへし折られるぞ。

前に俺に手を出した敵対組織の刺客がどれだけ心が折れたか・・・

テレビには昔、最後に会つた時から変わらない姉さんの笑った顔が映っていた。

・・・不老不死の人。俺より十以上年上のはずだぞ。
なんで二十歳から顔が全く変わってないんだよあの人は・・・親父もだがなんで姉さんも化け物なんだ?

「おとうさん、しりあい?」

「・・・うむ。正確には親父の知り合いで昔に世話になった人だ」「お祖父さんの?父さん、でもあの人は二十歳前後に見えるけど」「あれで十三歳年上だ。俺よりもな」

ピシッと固まる千冬。一夏は相変わらずのほほんとホットミルクを飲んでいた。

姐さん・・・偽名だらけでわからんが俺に名乗ったのは安心院なじみ(あじむ なじみ)だったか?
変な名前だが、前に

『ボクの事は親しみを込めてなじみさんと呼びなさい。もしくは妻と・・・』

『なんでやねん』

・・・あつたな。うん。こななことが。

確か・・・さ、さ、さ・・・なんだっけ?とある対暗部用暗部の

十六代目当主だった気がする。

なんだが都市伝説では姐さんはその暗部の創始者で初代当主って噂があるが・・・どうだろ?

親父にひけを取らない戦闘能力、よく回る頭、絶大なカリスマ・・・それが姐さんである。

なじみさんと昔は読んでいたが姐さんと変わったのはとある舎弟から聞いたことで呼び始めたのである。

・・・まあ、とある舎弟Aは姐さんに折檻されて入院したが。

何を隠そう、俺のファーストキスは姐さんに奪われたのである。小学五年生にご褒美に軽いキスをするはずだったが姐さんに舌まで入れられて喰われる一歩手前だったと記そつ。

親父に助けられなかつたら大切な何かとお別れをした気が・・・。
くそう・・・ファーストキスは好きな人に捧げようと思ったのに・・・
・・と悔やんだ。
姐さんは好きだが、ファーストキスを無理矢理奪われたから・・・
微妙。

「・・・どういう関係なの?かなり親しいみたいだけど・・・」

・・・そんなに睨むな。何を不機嫌になつてゐるかは知らんがみたらし団子の串が折れてんぞ。

「さつき言つたがお世話になつた人だ。母さんが死んでからは母親代わりをしてくれてた」

「・・・ふーん・・・本当?」

「・・・なぜ疑う? そりやあ、ファーストキスの相手は姐さんだが・・・」

バキイツ!

「ひえつ! ?」

「・・・おい千冬。したんじやなくて無理矢理された(・・・・・・)からな? 僕からは一切してない」

「・・・ふ、ふふふ・・・」いつは敵敵敵敵・・・

折れた串を握りながら千冬はぶつぶつと呪詛を唱えながらテレビの姉さんを睨んでいた。

・・・束もそうだが千冬も大概ヤンデレだな。どこで育て方を間違えたんだ?

延々と呪詛を唱える千冬に怯える一夏と晩飯を作ることにした。

その途中で束からどうやったのか、俺の携帯にメールが送られ、脅迫じみた内容が書かれていた。

死ね蛆虫とか、ちーちゃんを汚すゴミがとか、わざと死んでちーちゃんを渡してくれない?みたいな内容だ。

・・・そういうれば束つて名字何かな?知らないんだけど。

「え? 束の? 束は篠ノ之だけどうかした?」

「・・・は?」

「あーそれそれ! ほづきちやんなのなまえもそれだよおとづせん!」

「・・・し、篠ノ之・・・? 千冬、一夏、マジでか?」

「「「うん」」

・・・うわあ・・・東雲じやなくて篠ノ之・・・あの馬鹿の娘かよ!

・・・つてことはあの人の孫・・・理解した。生まれるべくして生まれたんだな。彼女は。

「・・・一夏、会いに行くぞ」

「え?」

「篠ノ之なら俺も知ってるからな。挨拶するついでに束の話を聞きに行こう」

「父さん？なんで束の名字でそんなに慌てるんだ？」

「……………」
篠ノ之んとこの先代、つまりは束の祖父なんだが……俺の、剣の師匠なんだよ

「……………え？」

てなわけで篠ノ之家、篠ノ之神社に行くことになった。

あの馬鹿（柳韻）から聞かにゃならんな。あいつ、子供は大切にすること思つたんだがな。

結果次第では躊躇いもなく柳韻を殺してしまつかもな……。

・・・今日の夢に姉さんが出てきて喰われそうになつた。
鬱になつて死にたくなつた。

修正しました。

本日は晴天なり。

季節外れの台風も去り、嵐も嘘のように過ぎ去った。
雨が降つたせいか、少しじメツとしていたが特に気にならなかつた。

「・・・おとづさん、じいじへ。」

「篠ノ之神社。懐かしいな・・・かれこれ親父が死んでからだから・
・十二年か。何も変わっていないな」

現在、我ら織斑ファミリーはとある神社に来ている。
名前は“篠ノ之神社”。昔に修行していた時に住んでいたことが
ある場所である。

今日は束に会つたまど一夏の言ひ“まつきちやん”とやうに会つ
ためにここに来た。

あのジジイ、まだくたばつてないかな・・・。

「お。じいだじだ」

「・・・道場?大きいね」

「まあな。かなり昔に建てられた武家屋敷を改装したりしこから広いのは当たり前。た・て・と・・・」

神社の裏。少し分かりにくいがそこには木の扉があり、そこを開けると庭があり、その先には道場があった。
千冬と一夏ははへつと感心する。

その間に俺はまへつと道場に近付くと中から僅かな音が聞こえる。

なるほど……練習中か……好都合だな。

一やりと笑ひと千冬と一夏に待機するよひとよひ。
でもついてくる。とよひので何があつても手は出せない、口せ出さないと約束をした。

「えじや……たのも~~~~~!~!~

ズーポンシ~~~

「え、!~?」

「わつ!~?」

「お邪魔しま~す。道場破りで~す!~」

道場の扉を蹴り開けてずかずかと中に入る。

中に入れば袴を着た男女が竹刀を持ったまま固まつており、俺は靴を脱いで跨ぐ。

キヨロキヨロと見渡すと、壁側に苦虫を潰したような顔をする淡いイケメソがいた。

「…………お前か春樹……」

「ういっす！ 柳韻、元気にしてたか？」

現在進行形で苦虫を万単位で食い潰したような顔をするイケメソは腕を組みながら俺を嫌そうに見ていた。

そいつの名は篠ノ之柳韻しののの りゅうじん。篠ノ之神社、道場の現師範代である。

「お前は昔から変わらんな。二十歳の時からまったく老けてない

「体質だ。親父も似たようなもんだろ？」

「…………まあいい。何をしにきた春樹？」

「道場破り。てめえがどんだけ強いかと俺がどんだけ力を取り戻せるか知りたい」

「…………ふん。まあいい…………積年の恨み、ここで晴らしきせてもうひづぞ」

「それ、負けフラグだから。俺、カツコいいと思つてゐるが力
ツ「悪いぞお前」

「…………殺す……春樹、貴様は何も変わつてないのか！？」

「変わつたぜ？体重と好物が。酒とマグロに加えてケーキをプラス
だ。あ、他には一夏と千冬が好きだ」「

「ぐつ・・・・貴様あ・・・！」

「やるの？やんのか？やんのか」「アリ・・・てめえ、一度も俺に勝てなか
つたくせにいきがんじやねえぞ柳韻」

「は、春樹いいいいいいいっ！――」

「あ。千冬に一夏、下がつてな」

ぽかーんとしている千冬と一夏を壁まで押してやると木刀・・・
ではなく真剣を持った柳韻がこちらに向かってきた。

「いいねえ・・・達人の殺氣、それは衰えていた俺を目覚めさせる
・・・

「はあああああああああああつ――」

「樂しませぬか」
柳韻

「あ、いちか・・・あのひとせへ、

「うひあひー・親父直伝のハコマッシュオー・・・

ぐへ・・・・・

「あー、めづれちやんとーおれのねといひだよー、まあこはなしたよー
ね？」

「うふ・・・・・う！」こ、 わがしひね・・・

なんかスゴイパンチ（右へ）――

ドッゴオオオオーンーー

ぐぬおつ！？道場の壁に穴が！？

「ちーちゃん！ 束さんにお会いに来てくれたの！？」

「 束・・・ほら。父さんだよ、なんかお前の父さんと知り合いみた
いだぞ？」

・ あの腐れ野郎が

チエストオオオオオオオオ！！

カツキイイイイン!!

な、なんだと！？

ぐばあつ！！

「え? いかにおひわせとちかひはせしつあこなの?」

「ああ。父おじはおの祖父さんの弟子と聞いたんだが……」

「じこわまの？あの、あなたは……」

「あ、すまないな。織斑千冬、一夏の姉である人の娘だ」

「は、はじめまして……しののぼつわひといこます」

親父直伝！『手刀で何もかも叩き斬れ』――

ズッパアン――

や、やめろ春樹！道場が崩れる――

ふはははははは――なんか楽しくなつてきた――

「おれ、おじむりこちかーおねえちゃんは？」

「・・・君、ちーちやんの弟？」

「うそーちふゆねえがいつもおせわになつてますー。」

「・・・うん。君はいいかな？私は篠ノ之束。束さんと呼ぶがいい
いっくん！ぶいぶい」

させつかあ！織斑家必須科目『妙に痛い目潰し』――！

ズブツ。

ぐわああああああああああああー?目が!目がああああああああああああ

「・・・うまい・・・いかか、いちかのおとづれっこね・・・」

「うんー、まえにくまをなぐつゝやしたっていつてたよー。」

ドッゴオオオオン！！

ちよ、まつ、ちよつと待て春樹！

ମାତ୍ରାକାଳୀନ ପରିବାରରେ ଏହାର ଅଧିକାରୀ

「気にするな篠田ちゃん、父をさせあんな感じだから仮にしたら負けだぞ・・・はあ・・・」

「ちーちゃん・・・やつぱり殺そつ。指名手配させて世界から狙わ
れるように・・・ぶつぶつ・・・」

ランインパクト!!

著作権が……『いやああああああああっ!!?』

ズドオオオオオン!!

「…………いつまでやるのだ父さん……」

「おーーーす!!」おとづせん!てからビームがでた!』

「ええ……?」

最後!親父直伝裏奥義!『シャイニンググウェイザード改!!』

あべっし!!

「…………」「」

「あつはつはつはつは！悪い悪い！ついやりすぎたわ！」

「春樹貴様あ！道場の修理にいくらかかると思つてゐるんだ！？」

柳韻との模擬戦、もとい俺のワンサイドゲーム終了後、道場は穴だらけになつていた。

他にも門下生数名がランインパクトに当たり、ボンバー・アフロになつっていた。

最大の被害を受けた柳韻は軽く頭に包帯を巻いて道場の無事な床に座つて俺を睨んでいた。

当の俺は爆笑しながら柳韻の肩をバシバシ叩いているが。

その近くには千冬に束、一夏に篠ちゃんが道場の穴が開いた場所をつついたり、残骸を持っていた。

「・・・お前、体力が落ちたな？昔ならもっと鋭い動きができるだろ？」「

「あー、お前にはわかるか……“氣”の操作も下手になつたし」

「まあ……今までサボつていたツケだろ。なのにあの戦闘能力……化け物め」

「その化け物と戦つてその程度で済むお前もお前だからな？」

不良やヤクザ相手に暴れたから勘は戻つたが体力等はまだ微妙な感じである。

ランインパクトは某野菜少年が主人公の筋肉バグキャラの技だが、“氣”を使うからな。

昔なら本気でやれば駆逐艦を消し飛ばせたが本当に衰えたな。

柳韻は真剣を鞘に納めながらため息をつく。

んだゴラア……殴り殺してやろうか。あん?

「春樹……もう大丈夫なのか?」

「……ああ。親父が死んだのは仕方がないと振り切つたよ。くよくよしてたら親父に殴られるからな……それにガキもできたからな」

「……信じられんな。あの春樹が子供を持つとは……昔から子供に好かれていたが……」

なんでこう、昔からの友人は信じられないみたいな顔をするんだ?

子供は昔から好きだし、好かれていたし。だから何の問題はないだろ？」

少し大きめの竹刀を持つ千冬、簫ちゃんが使っているだろう竹刀を持つ一夏を見ていると柳韻もまた、一人を見ていた。

視線に気付くと千冬は軽く微笑み、一夏は満面の笑顔で竹刀を持ちながら手を振っていた。

それを微笑ましく見ながら手を軽く振り返した。

「父親らしくしているな春樹。かなりなついているじゃないか」

「まあな。可愛くて堪らん。邪魔するやつを一分で消し炭にできやうだかんな」

「…………昔みたいに山を消し飛ばすなよ？」

「善処する。あれは仕方がないだる」

「…………まあ、昔にちよつと……ね。俺も若かつたときつかんと言ひか……。

「それより柳韻。てめえに聞きたいことがある」

「なんだ? そんなに改まって」

「お前の娘、束の事だ」

ピクッと眉が動いたのがわかつた。

柳韻は真剣な表情で目を閉じると何かを考えるよつた仕草をする。

持つていた真剣も床に置いて腕を組むと言ごづらやつて口を開く。

「・・・束は生まれた時から剣の才能が無かつた。代わりにあり得ない頭脳を持つて生まれた」

「確かに・・・あの年での頭脳は異常だ。響と渡り合えるほど の、な・・・」

「・・・やはり、か・・・」

「で?てめえはいつたい何をしてるんだ?束があそこまで歪んでるのはてめえのせいでもあるんだぞ?」

柳韻は千冬に抱きつく束を見る。

織斑家同様、篠ノ之家もまた昔から存在する由緒ある家系。

最初は神社の巫女としての家系だが、いつからか“篠ノ之流古武術”を編み出した時からそれは変わり、剣術家として変わった。

最初、織斑家と篠ノ之家は犬猿の仲だったが、俺の親父と柳韻の父親、篠ノ之總嚴しののしどうげんの代から仲良くなつた。

親父曰く、根性を叩き直したらなんか仲良くなつた。らしい。

ジジイから剣を教えてもらつたが、やはりどいか、才能の有無で

差別のよくなものはするのだろう。

子供は鋭いからそういう感情には誰よりも早く気付く。

それを知ったからこそ、束は歪んだのではないか？

篠ノ之家に生まれたのに剣の才能は皆無。代わりに響と並べるような頭脳を持つて生まれた。

嫌わない方が難しいだろう。だが、俺はそれすらも受け入れられる。

・・・親父がそうしてくれたよ。

「てめえは馬鹿か？自分の娘と接するのに避けてどうするんだよ。子供は勘がいいからすぐにわかるぞ。嫌われてる」とくらくな

「わかつてゐる。わかつてゐるんだが・・・どうしても考へるんだ。なぜ、あの子はあんな風に生まれたのか・・・って」

「・・・見損なつたぜ柳韻。てめえがそんなクズだったとはな・・・昔は背中を預けられる親友だと思つたんだがな・・・」

「・・・」

「話は終わりだ。もし、束との接し方を違えるようなら、ま・・・俺はお前を殺す・・・！」

昔から衰えてない殺氣を柳韻にぶつけながら、忠告をする。
・・・時が経てば人は変わると云うが、変わらないでほしかった
な・・・。

「・・・帰るぞ千冬、一夏。話は終わったからな」

「え? あ、うん。わかつたよ父さん」

竹刀を持っていた二人を呼ぶと、そのまま篠ノ之道場から出る。去り際に、柳韻の耳にこいつぞり噛ぐ。

「ジジイにも伝えとけ。もし、変わらぬよつなら俺は篠ノ之家を破壊するとな・・・」

「は、春樹! お前つー!」

「自業自得だ。あの子を追い詰めたのはてめえらだ。てめえらがあの子に愛情を注いでやつてしまはしなかった・・・わかるな?」

「ぐつー!」

「・・・はじめまして。まつきちやん・・・でいいのかな?」

「あ、は、はい!」

一夏と同い年のパーティーをした少女に話し掛けると、静かに自己紹介をする。

「この子が東の妹か・・・目が似ている。歪みとかは関係なく、どこのか、似ているな・・・。」

自分の名前を教えると、せつせつちゃんと……篠ノ花^{しのなは}と挨拶を交わす。

「いい? 君はお姉さんが好きだろ?」

「はい! ちょっとこのせいじまんのおねえちゃんです!」

「うん……君はそのままでいい。お姉さんを支えてやってくれ」

「……?」

「まだ、難しいかな? でも忘れないように。家族は、かけがえのないものだつてね?」

よくわかつてないようだが、篠ちゃんは花が咲いたような笑顔で頷いた。

頭を撫でてやると立ち上がり、千冬と話す束に近づく。

「……なに? 今はせつせつちゃんと話してるんだ。お前に用はないから消えろよ」

「た、束!」

「……忘れるなよ。人は一人では生きられない。たつた一人の肉親と親友だけではお前は間違なく壊れる(・・・)ぞ」

「・・・つーう、五月蠅い！五月蠅い五月蠅い五月蠅い！
お前には関係ないだろ！束さんの事は何も知らないくせに…！」

「当たり前だ。ちゃんと話してくれないからな・・・辛いことがあれば、千冬に相談するんだ、俺は嫌なんだろ？千冬、お前になら束は本心を明かす。絶対に、束を“一人にはするな”」

「？よくわからぬいけどわかつた」

「じゃあな」

最後にポンと頭を軽く叩いてやる。

払い除けるかと思いきや、抵抗がなかつたのに少し驚きながら今度こそ篠ノ之道場を出る。

・・・少しばかり合ってくれたらいにのにねえ・・・。

柳韻、一度とへマはやらかすなよ。

お前は俺と同じ、父親なのだから・・・。

今日の天気は晴れ。

雲もあまりなく、日光がちゃんと穏やかに照る、そんな日。
今日は祝日で休み。父さんと一夏と家におり、遊びに行く予定だ
つたが……。

「うーーー……げほっげほっー。」

「38・6・・・風邪ひいたの?」

父さん、風邪ひいたよつだ。

いくらバグキャラでも風邪はひくんだねって実感したよ。

「ち、千冬……貴様、俺を化け物扱いに……げほっ、したな……?
?」

「ち、さあ、ほら。薬を飲んで」

訂正。バグキャラは風邪ひいてもバグキャラ。

なんで心が読めるのかわからない。もしかして勘?

私はベッドの上で死んでいる父さんに薬を飲ませると頭に冷えピ

夕を新しく張つた。

あ、あ、～と気持の良さそつた声を出す父さんは普段の堂々とした態度とは真反対なので少し新鮮だ。

「ちふゆねえ、おとうさとだいじょうぶ?」

「・・・微妙だな。まさか父さんが風邪ひくとは思わなかつたからどうなるかわからないな。今日は出掛けるのは無理そうだ」

「えーーひきしづりにキャッチボールしたかったのに〜!」

「あ、〜、すまん一夏。埋め合わせはするから部屋かリビングで大人しく・・・げほつ、しどけ。風邪移したら大変、げほつだからな

やうに父さんはボスッと布団にへり込むと口を開じた。

・・・なんか少しだけてる顔が赤くて色つ ろげふんげふん!

「ちふゆねえ、かおがきもちわることよ」

「・・・い ち か ?」

「い」みんなさこちふゆねえーー。」

「い」と笑いかけると一夏はなぜか頭を下げる謝る。なぜ?

「（・・・無意識だとしたら姉さん以上の恐怖になりそうだな・・・
頭痛い）」

「じゃあ父さん、私と一緒に夏はツビングにいるから何かあつたら呼んでね？」

「んー」

父さんはのろのろと布団から手を出すと力無く手を振った。
本当に珍しい。父さんはほとんど風邪や病気にかかつたことない
つて言ってたのに。
・・・ならぬ方があり得ないけどね。

それに、たぶんだけど風邪をひいたのは前の季節外れの台風の時
かな？びしょ濡れで帰ってきて上半身裸でうろついていたから風邪
になるのは仕方ない気がする。

シャワー浴びても意味ないよ父さん。
油断してたせいで風邪になるとか・・・。

「ちふゆねえ、こまからなにする？おとつかなはづけないみたい
だしね」

「一人で出掛けるのは駄目って言われてるし・・・私は父さんの看
病するつもりだ」

「ならおれもーおれもかんびょつするー」

・・・迷うな。父さんをノックアウトした風邪だ。

一夏に移つたらとんでもないことになりそうな気がするな・・・
うーん・・・。

もしかしたら未知の病原菌かもしけないし・・・「ひむむ・・・。

取り敢えず一夏には雑炊か何かを作るのを手伝つてもらおう。
私はまだご飯を炊くこととお湯を沸かすしかできないし。

・・・今情けないとか言つたやつ・・・斬り殺すぞ。

なぜかは知らんが失敗するんだよ！

「ちふゆねえ？」

「む。なら一夏には雑炊を作つてもらおうかな？私は作れない・・・
し・・・」

自分で言つてなんだが地味に落ち込む。

男である父さんは料理が得意で女である私は苦手で一夏は上達している途中・・・なぜか腹が立つてきた。
これが世の理不尽といつやつか・・・。

なぜ神は残酷なのだ！料理もだがなぜ私はむ、胸の成長が遅い！？
束は私達の中では巨乳と崇められるほどでかいのになぜっ！！！
答える神ッ！！貴様は私が嫌いかああああああつ！！！
嫌いじやないなら胸を大きくしてください！（必死）

・・・」ほん。失礼、取り乱しました。

毎日朝に牛乳は飲むのだが束のようにたわわにはならん。なぜだ。束は胸がでかくなる魔法でも使っているのか？

千冬は同年代では大きい部類に入ります。
束が異常にでかすぎるだけです。

「わかったー！・・・でもちふゆねえ、りょりうできないんじや・・・？」

「ぐはっー。」

一夏の何気ない一言により、私は胸を押されて蹲った。

・・・父さんが言つていた無垢な子供のきつい、かつ何気ない一言に一夏胸に突き刺さる。これ、本当のよつだ。

だつて一夏・・・首を捻つてなんで？みたいな顔してるもん。もし狙つてやってるのならアイアンクロード沈めてやる。

「と、とにかくー！一夏は雑炊を作つてくれ！いいなー？」

「いえっむーー。」

わーい！と言わんばかりに一夏は走りながら台所に行き、手を洗う。

それから鍋やら冷蔵庫から冷やし飯、卵、ネギを取り出すとまな板の上に置いた。

・・・はつ！？しまった！一夏はまだ一人で火は使つてはいけないんだつた！

私は慌てて台所に行くと一夏と卵雑炊を作ることにした。私はまだギリギリで火を使つことは許されているからな。

・・・だけど父さんがクイズミリ ネアの一千万の問題みたいに私に火を使わせるのを悩んでいたのを思い出すと不安がある。火を使わせるかつてだけで二時間も考え込んでたし。

「（・・・以前に使つて火事になりかけたのに気付けよ。どんだけ慌てたと思つてんだバカヤローー）」

「あれ？おとうさんの「火がきこえたよ？」

「・・・父さんは寝ているんだぞ？声が聞こえるはずがないだろ？」「

一夏の将来が心配になつてきた。

何はともあれ、雑炊ができたので一夏と父さんの部屋に雑炊を持っていく。

父さんの部屋はマンションの一室の中でも一番大きく、そこにほんきングサイズのベッドがあつたりする。

・・・最初に聞いたら「寝ます」だろ」と言つてたが・・・で
かいぞ父さん。

逆に寝られるのか?私は普通に畳の上の布団がいいんだけど。

「おとつみとおとつみとおとつみとおとつみとおとつみ

「えー、ホーリー

のやのやと起き上がる父を何度も言つが普段とは違つ様子なので新鮮すぎる。

なんかこいつ・・・弱々して場面を見ると守つたくなひとつな・・・

「まむまむ・・・

「おこしこ?」

「まづくはなー二ギヤ

「・・・ナニは美味しつて言こなよ父ちゃん・・・

一夏が雑炊を父ちゃんと食べさせた(あーん)とまた布団こへるま
り、爆睡し始めた。

・・・あれ?私がやるまづだったあーんは?

「・・・ぬすりじこねちふゆねえ。おとつれさがいじめでなわって
るのつてせじめじじやないにかな?」

「確かに・・・だが今日せびいじで寝よつか?」

一応、私達の部屋にもベッドはあるが、たいていは父さんのベッ
ドに潜り込んで寝てこる。

一 夏はまだ小さこから父さんと一緒に寝てるねど。

・・・なんか、いい匂いがするんだよね。父さんは。

・・・Jの発言、私が変態みたいにならないか?

いい匂いがするのもそうだが、父さんと一緒にいると安心感がある
し、朝起きたらストレスとかゼロって素晴らしいオプション付きな
のだ。

だから私は父さんと一緒にー・ファザコンとか言われても構わん!
といつか今のうちに父さんと一緒にたいー!

「ねえねえちふゆねえ、こまからなにかしない?・おとつれさが
つたし」

「なら人生ゲームしよう!ー束さんが持ってきたやつー」

「……………待て。今なんかいたぞ」

声がした方を見ると束と妹の簫がいつの間にか部屋に侵入していた。

・・・鍵は？確かにマンションのオートロック機能、なかつたか？

「束さんが破つた！オートロックなんざ束さんの前では無意味無意味！」

「…………あ。もしもし？警察ですか？不法侵入者が…………」

「わー！待つて待つて！束さんと簫ちゃんは呼ばれて来たんだよ！…………そこに寝ているやつかー！」

「…………は？父さんが一人を呼んだのか？」

「遊ばないか」？みたいに言われたから来たんだぜーぶいぶい

いえーい！とピースをする束、おどおどしながら束を止めようとする簫・・・。

どつちが姉かわからん。

それは兎も角。不法侵入した束を父さんが昔、使っていた竹刀で頭を叩いておいた。

痛みに悶える束を放置して父さんの脇にある体温計を抜いて見て

みる。

・・・ 37 - 8? え? 早くない? まだ一時間くらいしか経つてないのに下がるの早くない?

・・・ まさか、回復力もバグキヤラ並?

医者泣かせだな。父さん。

「ちーちゃんちーちゃんー 束さん達とゲームしようつー」

「だがな・・・ 私は父さんを看病しなければならないし・・・」

「なら」れ。束さん特製の風邪薬だよ。これなら少しは治りが良くなるよ

・・・ こしても。あれだけ父さんを毛嫌いしてたのに束は最近はよく関わるな。

最初は私が束の悩みを聞いたりしていたが、ちょくちょく家に来ては何かを話してたりする。

そして、たまに夕食を食べて帰つたりと家によく遊びに来る。

瓶の中にある透明な液体を父さんに飲ませた束はポンポンと布団に入る父さんのお腹を叩いた。

・・・ 本当に、何があつたのだらつか・・・?

「ああ・・・ 束、これ。また読んでいいから。ただし、あまり荒らすな」

「そして、借りてもいいけビヤんと返すよつて、元よりでしょ?」

「・・・わかつていたらいいよ。本だけなら大量にあるしな」

「うん。ありがと・・・行こ、ちーちゃん」

束に手を引かれて父さんの部屋から出ると、父さんが使っている
けど入れてくれたことがない部屋の前に来た。
そして、束は鍵を差し込んで鍵を開ける。

中にはまず、大量の本が入っている本棚が目に入った。
その本棚はその部屋の壁を埋め尽くすような、それだけの量が部
屋にあった。

「い、これ・・・？」

「あ、ちーちゃん知らないの?」、「あの人の趣味部屋って言つて
たよ。たまに借りて本を読ませてもらつてるんだ」

本の背表紙を見ると、あらゆるジャンルの本があることがわかつ
た。

【医療関係、遺伝子工学、機械系の専門の本やら、父さんの趣味な
のか、ガンダムやらアニメ関係の本もあるのもわかつた。
・・・えー。父さんって本を読むのか?】

「あ。それはね、なんかあの人の親父ってやつが生前に集めていた
本を全部もらつたらしいよ?形見だけど俺には理解できないものが

多いから、つてね?」

「・・・なんかわかる気がする・・・父さん、勉強苦手って言つてたし・・・」

「え?でもあの人は高校じゃトップレベルの学力があるって言つてたけど・・・?」

「待て待て待て。なぜお前が知つてるんだ?私は聞かされてないぞ?」

「・・・んー。まず人に知つてもうなら自分を知つてもらわない
とつて言つてから色々、教えてもらつたんだよ」

・・・なんか束を殺したくなつてきた。

仕方がないのはわかる。父さんが束と向き合つたためにやつてるのはわかるけど、なんか嫉妬してしまう。
私も知らないことを私の親友が知つてるのは・・・なんか辛い。
たぶん、一夏も束ほど、父さんの事は知らないだろう。

一夏は筹とリビングのテレビでゲームをしてるらしいが・・・。
たしか、マ オカートをやつてたはず・・・。

「え?と・・・今日はどれにしようかな~?」

「・・・遺伝子工学つてわかるのか?」

「うん。なんかわかつちゃうんだよね……でもあの人は気持ち悪がつたりせずに接してくれるんだよね……」

本を読む束はどこか、嬉しそうに見えた。

だからかな？父さんになついて（？）いるのは……。

・・・父さんの食事をたかりによく家に来るのは……まさか、ね……？

だとしたら束、お前は私の最大のライバルになりそうだな。恋の・・・戦いの。私は負ける気はせんがな……。

「・・・今はそんな感情はないよ。まだ理解できないから……」

「やつか？・・・というかなぜ育児雑誌があるんだ？」

まさにカオスとしか言えないような部屋だな。ここは。見たことがない本や持ち出し禁止とか書かれたモノまであるんだが……。

束は鼻唄を歌いながら本を何冊か抜き取ると重ねて部屋から出ようとしていた。

「おい？」

「ん？借りてもいいけどちゃんと返すよ」とって言われたからね。暇潰しに借りるんだ。学校で読めるし

あの六法全書つてまさか父さんのか？

前に束が学校で読んでたタウンページよりも分厚い本は。

束は部屋に鍵をかけると、本をコロコロしながら持ち歩き、鍵を父さんの部屋の机に置いていた。

それから篠ちゃんに会う~と言つ束とリビングに行くことにした。

しばらく、とか夕食を食べるまで家にいた二人は風邪が治った父さんに車で送られていた。

・・・新しい父さんをいくつも見れた日だった。

修正しました。

本日は晴天・・・なり？

まだ暗いからわからないが天気はいいと思つ。

現在の時刻は午前五時半。よい子の皆、カラリー戦士の方々は夢の中だらけ。

お天道様はまだ顔は出していない。

「ふああああ～・・・ねみい・・・」

「まじり父さん、早く行くよ」

「うーーい・・・」

「おれもねむい・・・」

我らが織斑家は午前五時半に起床、支度をして朝のランニングに出掛けの前である。

千冬が中学校の剣道部に入ると鍛えるとスタイル維持の両立て規則正しい生活を（主に俺に）強要された。

クソ眠い中、千冬に一夏と一緒に叩き起しられ、ジャージに着替えるのは嫌にイライラする。

実際に一夏はこつこつこつくづくづく船を漕ぎながら隣をゆつたりとしたペースで走ってるし。

「あ、おはよー」やこます」

「うわー」

「おはよー」やこます」

「うー、おはよー」やこます」

すれ違つランニングをする人に挨拶をしながら定番の川原を走る。微笑ましそうにおっさんは一夏を見ながら反対側に走つていった。欠伸をかみ殺しながら隣と前を走る自分の少し大きくなつた子供達を見る。

小学生だった千冬は中学校に上がり、期待の新入生として注目を浴びてゐるらしい。

剣道部に入ったので、元インターハイ三連覇をした俺がたまに教えていいる。

篠ノ之道場にじょうかと思つたが、ジジイがめんどくさいからやめておいた。

そして一夏は少しだけ背が伸び、やがて小学生になるかならいかといつた頃。

・・・一夏の顔、親父の面影があるから懐かしく感じじる。

しばらく走ると、軽く千冬と無手で修行をする。

竹刀や刀を振るにしても、まずは身体の使い方を知らないといけないからな。

「はあー。」

「はい残念。それは悪手だ」

「え？ あやつー。」

その間、一夏は川原の石で水切りをしていた。
まだ竹刀は持てないし、戦えないから見学になる。

それから一十分ほどやると、再び来た道を戻るよ^リう^リソ^ニン^シグ^ル
をし、帰宅。

早起きした束が我が物顔でリビングで寛いでいるのは気にしない。

「あつ、おつかれいー！」

「・・・お前、いつか捕まるぞ？」

「にゅふふふ。束さんの力をもってすれば國家権力の狗なんざチ
ヨロ^イチヨロ^イー。」

・・・頭が痛いな。

軽く汗を拭いてから朝食の用意。

束と一夏も料理はある程度できるから手伝つてもうつが、千冬は
シャワーを浴びている。

・・・朝食、まともなになるな。千冬が参加すればやばこ」と
になるし。

ま。そんなこんなで朝食を食べる。

今日はフレンチトーストで済ませ、糖分ゼロの「ブラックコーヒー」
を飲みながら新聞を読む。

・・・誰だ、新聞を読むのか?とか言った奴は?世間の情報を知
るには新聞を読むのがいいんだよ。

「ほり千冬。弁当作つといたから

「あいがと父さん。じゃ、行つてきます!」

「あー、待つてよひーちゃん!」

千冬と束は学校に行き、弁当を持参。
束も俺が作る弁当が気に入り、略奪するので仕方がなく作つてい
る。

皿を洗つと、準備を済ませて一夏を幼稚園に送り、仕事に向かう
ことにした。

幼稚園の山田美弥先生と軽く話してから幼稚園を離れ、自転車で
会社に出勤する。

「さよーござります」

「おや。今日は早かったね春樹君

「はは。一夏が準備が早かつたからですよ十蔵さん」

「はははは！父親してゐるね春樹君、私も子供が欲しくなつたよ
いやいや、子育ても辛いですよ。一夏なんか最初は夜に泣いては
疲れましたからね・・・」

会社に出勤すると、真っ直ぐに清掃員用ロッカーで着替え始める。
そして、清掃員として働く会社にの先輩に当たる巒木十蔵くつきわきじゅうざうさんに挨拶する。

十蔵さんは笑いながら緑色の制服に着替えている。

本当に寝不足になりますよ。俺は働いてなかつたからいくらかマ
シだつたが・・・。

「今日も頑張りましょうか春樹君」

「うす」

午前九時、仕事開始。

今日もいつもと変わらぬビル内部を清掃することになった。

普段も変わらず、ビル内部を清掃したり、備品の補充したりする
のが俺達の仕事。

たまに会社に届けられた手紙やら書類をそれぞれの部署に届けた

ります。

時折、女課長に食事のお誘いがあるが、全て断つておいた。
「うちには一人+居候（？）みたいなのがいるからな。

「・・・春樹君、相変わらずモテるね」

「そりなんすよね・・・俺、結婚しないですからお見合いもかな
り来るんですよ」

「（・・・ルックスも性格もいいのに勿体無いね。彼、結婚願望が
皆無じやないか・・・）」

「・・・なんすか。俺の顔に何か付いてます？」

「春樹君。結婚は早目にしないといい人が見つかなくなるよ？」

「（心配なく。一人の子供が一人立ちできるようになつて、なおか
つ余裕があつたらしますよ・・・たぶん」

トイレにてトイレットペーパーを投げながら補充すると十蔵さんは勿体無い勿体無いと呟いていた。

・・・結婚、ねえ・・・あんまりしたいとは思わないんだがなあ・
・・。

「（本当に勿体無い。彼ほど謙虚な若者（？）はそういうこない。

彼と結婚できたら一家安泰で夫婦の仲もいい感じになるのだがな・・・

・)

「・・・次は十七階の資料室の清掃ですね・・・そういうえば十蔵さん、本業の方は（・・・・）いいんですか？」

「ああ、そちらは妻に任せているから大丈夫だよ。で、早く済ませましょーか」

「はい」

実は十蔵さん、会社の清掃員なんてやつてるが実はこの会社の親会社の社長なのだ。

視察の名目で十蔵さんの経営する会社の子会社で清掃をしながら横領やら賄賂、セクハラについて調べてるのだ。

・・・最初に聞かされたのは昼休憩だったな・・・十蔵さん、奥さんの愛妻弁当を食べながら

「実は私は社長なのよ春樹君。って言つたら驚くかい？」

つて言われた時はつい、飲んでいた珈琲を噴き出した。

しかも親会社の社長と聞いてビビつて腰が抜けたりはしなかつたが逆に納得がいった。

だつて十蔵さん・・・清掃員なんて生温いオーラを纏つてるから。それも人の上に立つ親父に似たオーラを。

それからは十蔵さんとはたまに酒を飲み交わす仲になつた。

十蔵さんの奥さんとも会つたが若い。歳（奥さんのために伏せるよー）らしいが二十代にしか見えなかつたものだ・・・。

そう詰つたら十蔵さんに駄田出しだれた。俺が童顔みたいなのはわかつてゐんだコンチクシヨー。

これが会社で働く俺の仕事模様。

午前九時に始まり、正午に昼休憩、午後一時半に仕事再開。それからは定時の午後五時半まで仕事をするのである。

「じゃあお疲れ春樹君。また明日もお願ひするよ」

「十蔵さんも。また暇になりましたら行かませんか?」

指でクイッと何かを飲むジエスチャをするとい、十蔵さんは満足そうに頷いた。

『ひやら飲みに行く約束ができるよつだ』

私服に着替え、働いていた全員にお疲れ様です。と声を掛けながら幼稚園に直行。

「あ、おとうさん～～！」

「悪い。待たせたか？先生、こつもありがとひやらこまゆ」

「あ、いえいえ！」

「ほり美弥先生、アタックアタック！」ヒソヒソ

「え、でもでも・・・私は・・・」

「じゃあ俺はこれで。一夏、乗った乗った

「あ、ちゅ、あのー」

夕飯の買い物もあるので早く、一夏を後ろの椅子に座らせてると幼稚園から出る。

後ろで先生方が何か言つていたが、気にしない。気にしてはいけない。

自転車を漕ぎながら一夏と話をする。

「今日の飯は餃子にしようかと思つんだが

「えー、おれはとんかつがいいなー」

「前に食べたから今度な?後は麻婆豆腐か何かを作ろうと思つ

「豆腐たっぷりで辛さは控えめー」

「よしあた。今日は手伝つか?」

「うーん・・・また、教えて?」

「了解だ」

自転車を走らせながら一夏と帰りで恒例の幼稚園で何があったかを話す。

前は先生方の田代が怖いとか言っていたが今は篠ちゃんや同年代の友達の事を話している。

取り敢えず先生方の話はスルー。なんかやらかしたら通報をしようかと思う。

「あ。おとうさん、ちふねえがいる」

「・・・帰つたばかりなのか?」

買い物を済ませ、前のカゴに一つの買い物袋、一夏が後ろで一つの買い物袋を持つ。
家の前に来ると、千冬となぜか束が二つ並んで歩いてくるのが見えた。

まさかまた飯をたかりに来たのか・・・?

「あ、ただいま父さん。買い物帰り?」

「ああ。というかなぜ束がいる?」

「飯を食いに来た！」

予感的中。束は飯をたかりに来たようだ。

念のために少し多めに買っておいてよかつたな、食材。

マンションの俺が借りてる部屋の鍵を開けると、真っ先に束が靴を脱ぎ捨てて入った。

制服の襟を掴むと、靴をきちんと並べさせてから入れる。千冬と一夏はきちんと靴を揃えてから入るようになつてあるので問題なし。

冷蔵庫に買ったものを入れると、一夏と束がリビングのテレビでゲームをしていた。

俺は豆腐や餃子の皮やらをそこから取り出すと、台所で夕飯作り。・・・」の役目、母親である秋枝の仕事なんだがなあ・・・でも無理か。あいつ、家事はできないし。

「おい、束。家に帰らなくともいいのか？柳韻とか篠ちゃんが心配しているんだ」

料理をしながらリビングにいる束の背中に呼び掛けると、力チ力チとプレイしていた束がピタリと止まり、画面にGAME OVERの字が現れた。

「・・・束さんはあんなのよりちーちゃんやいっくん、貴方と一緒にの方がいいよ。篠ちゃんはあれに気に入られてるし・・・」

ルル3でアーネスト・ロードやりながら束は寂しそうに呟いた。
なにやつてんだあの馬鹿親子は・・・柳韻、話しあひゆうことぬ
つただろ?

なのに束が寂しそうにしてちゃ意味がないだろうが。

「・・・仕方がないな。今日は泊まつてけ。お前の事だから着替えとかあるんだろ」

「…いいの？」

「ああ。お前が辛い時はいつでも助けてやると言つただろ？お前はまだ子供なんだ、大人に甘えてもいいんだよっと・・・」

完成した餃子を皿に盛ると麻婆豆腐も皿に盛り付け、千冬を呼ぶ。千冬と協力しながらテーブルに並べると、ゲームをしていた一夏と束もそれぞの席に座る。

「普段から遠慮なんかしないお前だから今更だな。空いた部屋があつたはずだからそこを使うか？」

「ちーちゃんの部屋がいい！」

「父ちゃん、部屋の変更を提案する。」二つと回り部屋だと何をやれるかわからん。」

「…………難題にぶつかったな」

「この変態をどこで寝かせようか。

一 夏は俺と寝るから駄目。千冬は最近一人で寝るがたまに布団に潜り込むことがある……。

脳内会議・・・会議・・・会議・・・終了。

「・・・どうでもいいや

「父ちゃん!?

「性的な悪戯をしないなら誰とでもいいし、布団は予備があるから使つても構わないぞ」

「わーいつ!

結果。千冬と寝ることになった束。

千冬は猛反対していたが、束が寂しくならないうちに。と言つて渋々ア承した。

許せ。今度またきちんと作り直してやるからさ。

それから一夏と風呂に入り、わしゃわしゃと頭の水気を取ると、

上半身だけは裸のままでタオルをかけてリビングに入った。

「千冬。風呂空ごたゞへ」

二二

み。 風呂上がりにビールを一本だけ取り出すと、一夏とグビッと一飲

長い髪を纏めて結うと、なにやらパソコンを一心不乱に呟く束が見えて声を掛けることにした。

「...・・・束?」

「わつひやいつ？！」

ポンと肩を叩くと、束はビックウー！と驚き、パソコンを抱えて後ろに飛ぶ。

少しだけ息が荒い束はプルプル震える手で静かに口を開く。

「み、見た？」

「?
なにがだ?」

「な、ならいいんだ！　あー、ビックリし、た・・・？」

束はホツと息を吐くと、視線を顔から下へと移り、顔を赤くした。

・・・あ。やべ。上半身は裸のまんまだわ。

取り敢えずソフトに置いておいたシャツを着ると固まる束を揺

15

「おーい束ー？」

「（はだかはだかオトコノハダカはだかはだかはだかはだかはだかはだかはだか）きゅう・・・」

「のわつ！？」

なんか束がぶつぶつと言い、頭から煙を噴き出すと、きゅうと言
いながら倒れた。

慌てて抱き止めると束をソファーに寝かせた。

・・・耐性ないのかね？ 柳韻のあれとかは見てないのか？
一応、柳韻には電話をして預かるることは伝えている。

柳韻は申し訳なさそうだったが、シジイはどうか嬉しそうな声をしていた。

ジジイ。昔は尊敬できたんだけど今は無理だな。くたばれ。

「やついや・・・」

束の抱えていたパソコンの画面、なんだつたんだろうな?

一瞬しか見れなかつたが、“エラ”というキーワードだけは見えた。

・・・なんか波乱の予感がするな。

ま。世界が束を拒否しても俺だけは味方でいよっ。

約束したからな。

何があつても味方でいると。

本日は晴天なり。

またあれから時間が流れ、一夏は小学生になり、千冬は受験生、生徒会長になつていた。

束や篠ちゃんもすくすく成長し、篠ちゃんは一夏に恋をしているようだ。

だがジジイはまだ束を毛嫌いしてゐる節があるのは頭が痛い。

千冬は生徒会長になつたせいか、かなりクールになり、口調もピシッとした感じになり、学校の教師にも絶大な信頼を得ている。また、髪型も変わり、俺の真似をして長く伸ばしてポニーテールのようにしている。

なんだが、千冬は髪とか手入れしないから俺が自分の髪に櫛を通してついでに千冬のもしてゐるわけだ。

さらに、千冬は剣道部を引退してゐるが中一で全国大会に出場、優勝して日本一になつた経歴がある。

新聞にも取り上げられ、類い稀なる剣の才に目を付けられて剣道部が強い高校にスカウトされてゐる。

だが、千冬はスカウトを断り、家に近い高校を受験する事になつてゐる。

本人曰く、父さんと一緒にいたいから。一人じゃ寂しいと甘えるから蹴つたのだが。

剣道部が強い高校に行くと寮に入らなければならぬから嫌だ。だそだ。

一夏は小さかつた身体も少しづつ大きくなり、腰より上の身長になっている。

親父の生き写しとも言える顔をしており、性格も似てきている。天真爛漫、唯我独尊、我儘小僧が親父だったが、一夏は他人を思いやり、弱きを助けたりしている。

前に篠ちゃんを虐めていた奴を懲らしめたことがあり、驚いたが、相手側の親御さんには頭を下げておいた。さすがに暴力沙汰は駄目だからな。

少しづつ、一夏には力の在り方と振るう心構えも教えなければ。と思う。

ただ、拳に身を任せればただの暴力。人のために振るうにしても、一步間違えれば暴力になりかねないからな。

・・・でも虐められている子を助ける一夏の成長に嬉しく思う自分がいるのは否定しない。

そして、篠ノ之束。柳韻の娘で稀代の天才である彼女。

彼女は篠ノ之家でも避けられているようで、もう俺の家に住み込んでいる。

ジジイは才能のないと明らかに人間離れした束の頭脳や精神を疎ましく思っているからかね？

自分の孫だろうが。普通に接して味方でいてやれよ。

束は俺と千冬に一夏と一緒に暮らしちょくちょく俺に甘えてくる。

父親である柳韻はどこか避けている節があり、ジジイは論外。母親も似たようなもので甘えることができなかつたのだろう。抱きついたり、添い寝をしてと言うが、拒まずに束の安らぎにな

ପ୍ରକାଶକ ନାମ

「なんだが。最近、千冬と束の様子があれなんで偵察しちゃいます」

「わーいっ！なんか刑事ドラマみたいっ！」

「しつ！ 静かにしろ、バレるだろ！」

「ふがつ、
ぶががつ！」

「あ、あの・・・一夏が苦しんでます・・・よ?」

まあ、最近の二人の様子がおかしいのでこうやって尾行をする事になつたわけだ（？）。

朝早くから消えた一人を追ひながら、そと隠れながら、
みたいな事はせずに、車を運転して遠くから盗みま・・・げつぶん
！観察している。

二人、特に千冬は親父の孫だからか、氣を感じやすく、追い掛けのものも楽なのである。

束は天才科学者であるため、尾行を察知する機械でも持つてそうなのだ。

だからできるだけ付かず離れずでじわじわと尾行をしている。後ろの後部座席には一夏と束の妹の篠ちゃんが同行しており、前乗り出してカーナビを見ていた。

「ん～～～～～～・・・」、だな。だんだん人気がない場所に歩

いていつてるな

「おー、すげー！ わすがは父さん！」

「凄い・・・離れててもわかるなんて・・・」

遠回りするように車を走らせながら、千冬と東を追つていねじ、ふと、氣が地下に行くのを感じた。

・・・地下？ なんでトに氣が動いてんだ・・・？

ま、いいか。カーナビを見てもデパートの地下に行つてるのがわかつたし、取り敢えず買い物をするか。

「あいつら、このデパ地下に行つたみたいだぞ。なんか怪しい事をしてるわけでも無かつたのか？」

「・・・じゃ 口？ 千冬姉と東姉は買い物に行つたの？」

「だな」

「姉さん、何をしてるんだろう・・・」

氣に乱れは無し。最初、脅迫されて陵辱されたかと思ったが、臭いはしない、精神も安定してるから大丈夫。
デパ地下ならなんか買つてるんだろうね。あそこ、かなりの品揃えだし。

カーナビを切ると後ろを向く。

一夏と篠ちゃんと田が合い、「にやつ」と笑うと親指を外に向かながら動かす。

「なんか、食うか？」

「食う！」

「た、食べます」

近くのファミレスでパフェやらケーキを一人に食べさせる」とこ
した。

「……はあ？ お前、自分が何を言つてるのかわかつてんのか？」

『すまない。父上が倒れて病院に行かなければならぬんだ。篠も、頼めるか？』

「くたばる寸前のジジイなござりまつとけよ。それより娘と向き合つたらどうなんだ？ あ？」

『……本当に、すまない春樹』

「あ、っ！ おい待てや柳韻……！ 切れやがった」

あれからファミレスから買い物やらをして疲れて寝る一人をソファーに寝かせてから柳韻に電話をした。

ジジイが倒れたらしく、病院に行かなきやならないようすで、束は勿論、篠ちゃんまで預けやがつたあの馬鹿。

母親であるあの人もジジイの世話。難儀だねえ……。

……どないしょ？ 束は家に住んでるけど篠ちゃんの着替えとかは……うーむ……。

「買い物行くか」

結局、これしか思い付かなかつた。

夕飯の買い物は済ませてるけどまた買い物に行くしかないな。

なぜかこの時は篠ノ之家から着替えを取りに行くといふ選択肢は浮かばなかつた春樹だった。

「テレビでも見るか。たしか相棒の再放送が・・・」

『左京さん！ これ！』

『・・・お手柄です。亀田君！ これでやっと、真実が見えてきました・・・』

テレビをかけると、再放送のお馴染み、相棒がやつてた。
眼鏡をかけた杉下左京、相棒の亀田薫のコンビによる刑事ドラマの定番である。

寝ている一人に毛布をかけてから冷蔵庫にあるコーラを取り出して見ながら飲む。

・・・にしても。あいつら遅いな・・・『ペ地下』に行ってからもう三時間経つぞ？

氣を探つても、場所は変わらないはずなん・・・ん？ セリヒト
に・・・？

「・・・おかしい。デパ地下はあんなに深くはないはず・・・今まで氣が下がってるんだ・・・？」

気になり、デパ地下まで行こうと立ち上ると、ドラマのBGMが止まり、緊急ニュースの音楽が流れる。
テレビに視線を戻すと、アナウンサーが慌てた様子で手に持つ紙を読み始めた。

『ドラマの再放送の途中ですが、緊急ニュースをお送りします』

「？ 珍しいな。衆議院の選挙があるわけでもないのに」

『今日未明、世界各国の軍事関係からの情報により、判明したことですが』

「・・・なーんか嫌な予感がするぞおい」

『謎のハッカーからハッキングとクラッキングを受け、軍事関係基地よりミサイルが発射され、それらが国会議事堂を狙う事がわかりました』

「んだとつー？」

ガタツと椅子が後ろに倒れ、寝ていた一人がビクッと起きる。ニュースの右上にはミサイルが発射された様子が映っており、合

成ではない事はすぐにわかつた。

「…………？」

「…………一夏、篠ちゃん。すぐに出掛けの用意をするんだ」

「え？」

「早くっ！　くそっ！　あの二人はまだそこにいるのかー…？」

国会議事堂…………から近い。ならばミサイルがここに来る危険性があるということ……。

チイツ！　誰だミサイルなんてハッキングで発射した馬鹿はつ！

兎も角！　今は避難しなければならない！

軽く荷物を鞄に詰めると、ガスやら電気を全て抜いてから戸惑つ二人を抱き上げる。

テレビはまだつけっぱなしにしたままだが、今は避難が先決。

「父さん！　何があつたんだよー！」

「話は後だ。今はここから避難してミサイルを避けないと……あの一人、どこにいやがるー！」

背中にしがみつく一夏、左手で篠ちゃんを抱えたままエレベーターに乗る。

乗る最中に携帯をラジオに設定してイヤホンを右耳にだけつけて
ニコースを聞く。

流れるのは避難勧告とその場所。それを頭に叩き込むとHレベ
ターから降りて走る。

「一夏、悪いが千冬か束に連絡だ。出なくとも何度も掛けろ」

「わ、わかった！」

「ごめんな篠ちゃん。なんかやばい事になつてるが心配はしなくて
いいからな」

「あ、は、はい！」

こんな時に車なんか使えば渋滞に嵌まつて動けなくなるから足を
使つしかない。

・・・だが、平和ボケした日本の国民じゃ、そんな事は思い付か
ないだろう。

パニックになるのは間違いないが、ニコースを流したのはある意
味、正解だ。

何も知らないまま、逃げずに死ぬよりマシだからな。

右耳に流れるニコースを聞きながら町を走る。

・・・ちつ。マトモな情報が入らないな・・・。

問題は日本政府がミサイルをいつ知ったか（・・・・・）、正
確にはいつ発射されたか（・・・・・）を知りたい。

「父さん。」

「なんだつー。」

「束姉に繋がつた！」

「よつしゃでかしたぞ一夏！……もしもし束か？」

『あつ。うん』

「？ こまじいことね。」「コースは見たのか？ 避難はしてるのか？」

『……じめんなさい。まだ話せないけど、今はまちーちゃんに全てを任せてくれないかな？ 貴方やこっくん達には怪我はないよつとするから』

「やれはばじゅーつ・・・

ふと、妙な音がして立ち止まり、振り返った。

・・・おこおい。おこおいおこー。マジかよッ！
//サイルが見えやがる！ そのままじゅーつ・・・
じづる。俺の目でほんやりと見えたから距離は長く見積もつて100・・・//サイルの速さを考えるとすぐ着弾するだ！

「チイツー！ 束、後で事情を話してもうひつかりなつ。」

『待つて！　ちーちゃんが・・・』

携帯を切ると、ポケットに仕舞つてミサイルから逃げるために公園にある地下水道へ向かう。

あそこはかなり広いから被害も少ないはず。一人を入れたら即刻、ミサイルを素手で破壊する！

さつきよつスピードを上げて走るが、ミサイルはどんどん近付く。状況が飲み込めた他の奴等も慌てて逃げ出し、近くの妊婦と子供が突き飛ばされたのが見えた。

すぐに近付いて手を貸すと、また走る。

「二人共、大丈夫か？　まだ走れるな？」

「なんとか・・・父さん、大丈夫だよね？　俺達、死なないよね？」

「安心しろ。何があつてもお前らは守る。すいません、ちょっと失礼します」

「す、すいません。私なんかのために・・・」

「いいつて。あんたの子供も赤ちゃんも守りますから・・・さひ、早く行くぞー！」

妊婦さんを横抱き、一夏と篠ちゃんより小さい子を背中に乗せると、一夏と篠ちゃんを前に走らせながら追い掛ける。

じつしている間にも、ミサイルはどんどん近付いてくるため、焦る妊婦さん。

・・・仕方ない。口止めするか。

「すいません。今から見るのは内密に願います。いいですね？」

「え？ な、何がですか？」

・・・ふう・・・。

静かに息を吐くと、身体の氣を右足に集中させる。

一度ステップを踏むと、後ろを振り向くように飛び、足を振り抜く！

氣刃・鎌鼬

振り抜かれた足から真っ白な光の刃が飛び、近かつたミサイルを破壊した。

「ぽかーん・・・」

「逃げるぞ～。ほらほら走れ走れ」

妊婦さんはあり得ないような顔をして後ろを見ていたが、あえて無視して公園に向かう。

鈍つた。前なら一振りで三つ出るはずだったのに・・・。
しかもしばらくは氣が使えないとかあり得ないし。

しばらく走り、シェルター代わりになる地下水道の入り口が見えてきた。

だが、人が多くて無理らしく、違う入り口に向かうこととした。
妊婦さんにあまりストレスはかかるないよう注意しながら。

・・・だが、さつきから可笑しいな。ミサイルがあまり来ない上に遠くで爆発する音が聞こえる。

ニュースも流れなくなってるし・・・何があつたん・・・！

嫌な予感がして後ろを見れば、一発のミサイルがこちらに向かうのがはっきりとわかつた。

周りには俺達しかおらず、焦る。

まずい・・・近くに着弾したら・・・。

考える間もなく、近くに着弾したミサイルの爆風が俺達を襲い、
吹き飛ばされる。

なんとか妊婦さん、妊婦さんの子供に一人を庇いながら壁に叩きつけられた。

全員、無事のようで安心すると、爆発した影響で飛来した瓦礫が頭を直撃し、意識が闇に落ちた。

「と、父さんッ！」

「春樹さんー。」

一人の慌てる声を聞きながら・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7710x/>

とある織斑家の最強親父

2012年1月10日16時52分発行